

# 基底の音節構造: 朝鮮語の媒介母音\*

## On the underlying syllable structure: Vowel epenthesis in Korean

千田俊太郎  
TIDA Syuntarô

### 1 「媒介母音」

朝鮮語の用言の活用においては、語幹と接尾辭の継ぎ目に母音 *u* が出没する場合があります。この母音は媒介母音、あるいは連結母音 (Bindevokal) と呼ばれてゐる。次は、語幹 *ka* 「行く」と *mal* 「食べる」に接尾辭 *-ko* 「(し)て」と *-na* 「(する)が」ついた形式である。このうち (1d) のみに媒介母音 (下線部) が現れる\*1。

- |                          |   |
|--------------------------|---|
| (1) a. <i>kako</i> 「行つて」 | c. <i>mal</i> ko 「食べて」                  |
| b. <i>kana</i> 「行くが」     | d. <i>mal</i> <u><i>u</i></u> na 「食べるが」 |

媒介母音の形態分析の可能性は幾通りもある。*mal**u*na 「食べるが」 (1d) で例を示すと、まづ、これを形式に分節する仕方が次の三通りある。

- (2) a. *mal-una*  
       b. *malu*na  
       c. *mal-u-na*

(2a) の境界認定方式では媒介母音 *u* が後続の接尾辭の一部だと考えることになる。その分析にも大まかに二通りがある。一つは単に {-*na*} 「(する)が」が *mal-u-na* の異形態をもつものとするものである。たしかに媒介母音は特定の接尾辭の前にはしか現れない。しかし、

\* この研究は科学研究費補助金 (研究課題番号: 21320082) の成果の一部である。關聯主題で言語記述研究会 (於総合地球環境学研究所) などで口頭発表をした際にコメントをして下さった方々に感謝する。

\*1 本稿の朝鮮語表記は傳統的な意味での音素表記に該当する。記號としては小学館『朝鮮語辞典』の發音表記に近いが、中舌から後舌の半低母音は  $\Lambda$  で示し  $\upsilon$  を所謂アレアのために使ふなど若干の異同がある。特にことわりのない表示は、音韻規則で言えば音節末音規則までの規則を適用した表層形導出の中間段階に屬する。朝鮮語においてはこの段階が傳統的な音素概念に近いものと考へるからである。筆者の考へる順序付けされた音韻規則については付録に詳しい。

媒介母音は {-na} 「(する)が」以外にも多くの接尾辭の前に出没する。この分析では多くの接尾辭が初頭音 *u* の有無による異形態をもつことになるが、なぜ多くの接尾辭が同様の交替形式を持つのか説明しないため、基底における語彙・形態情報がより複雑になってしまう。同様に (2a) の分節に基づく形態分析でも、「(する)が」の基底形が初頭に *u* をもつ -*una* であり、ある条件下で接尾辭初頭の *u* が削除されるといふ解釋がある。後に論じるやうに *u* 削除条件が不自然であるほか、またなぜ接尾辭初頭に *u* が多いのかといふ課題を残すことになる。

(2b) の境界分けは媒介母音が用言語幹に所屬すると考へるものである。この考へ方では通常、河野 (1955) のやうに用言語幹 {*mak*-} に *mak*~*maku*-の交替を認め、後續接尾辭を條件とする形式の使ひ分けを設定する。この方式は日本では「語基説」と呼ばれてゐる。この分節方式のもとでは基底形 *maku*-から *u* 削除を想定する共時分析も可能と思はれるが、後續の接尾辭に個別に言及する規則を立てることになるであらう。

(2c) の境界分けは、二つの解釋がありうる。一つは *u* がなんらかの機能を持つと考へる *u* 形態素説であるが、意味・機能が不明であるためその解釋は成立しえないだらう (cf. 伊藤 2009)。ただし「語基説」に基づく、媒介母音系以外に「第三語基」と呼ばれるもう一つの交替語幹形式があり、これにはある種の意味・機能を認めることができる。語基説は潜在的に (2c) の形態分析とつながる要素をもつてゐると言へる。(2c) の境界分けに従つたもう一つの分析は挿入母音説であり、本稿が主張する解釋である。そもそも「媒介母音」といふ用語自體、本來は挿入母音説に従つた命名である。しかし、現在「媒介母音」の用語はそのやうな含み無しに、如上の現象を指すためによく使はれてゐる。「媒介母音」といふ用語の使用者は母音挿入説論者と必ずしも一致しない。

以上の「媒介母音」の解釋をつぎに整理する。

- (3) a. 1. 多くの接尾辭が初頭音の有無による異形態をもつといふ交替形式説  
2. 基底の接尾辭初頭音が条件により削除されるといふ母音削除説
- b. 1. 語幹に接辭により選ばれる變化形を認める變化語幹説  
2. その變化語幹に機能的使ひ分けを認める *u* 形態素説
- c. 母音挿入説

このうち (3b-2) は先に述べたやうに成立が難しく、(3a-1) と (3b-1) は基底に複数の形式を設定する點で、前提と過程が單純な (3a-2) や (3c) の解釋に劣ると考へる。そこで本稿では媒介母音に對する母音削除説 (3a-2) と母音挿入説 (3c) の兩者を比較検討する。

なほ、韓國で主流の分析は (3a) であり、*u* が語幹末音であるといふ *막승민* (1931) 以來の

解釋 (3b) は現在は見られないやうである。日本でも多くの學者が (3a) を取るやうだが、一部は「語基説」を主張 (3b) してをり、特に朝鮮語教育の分野では一つの大きな流れを作つてゐる。日本では「語基説」に基づく語學教科書は非常に多い。母音挿入 (3c) の解釋は周時經 (1910) 以來<sup>\*2</sup>さまざまな提案が提出されてきてゐるが (배주채 2008: 307-350) 多くはこれを採らない。母音挿入の條件が完全には音韻的に決まらないためである。例へば先に擧げた用言語幹に-na 「(する) が」が後續すると kana 「行くが」(1b)、maluma 「食べるが」(1d) のやうに媒介母音が出沒するが、同じ音形を持つ-na 「(する) のか」が用言語幹に後續する際には (4b) のやうに媒介母音が現れない。

- (4) a. kana 「行くのか」  
b. maluma 「食べるのか」

本稿ではつぎの2節で媒介母音の挿入説と削除説を比較し、1脱落規則との關聯などにおいて挿入説の有利であることを論じる。續く3節では媒介母音出沒を引き起こす接尾辭の音形について検討し、媒介母音出沒條件に音節構造が大きく關はること指摘、基底形に音節を假定することで母音挿入の條件のある種の音節末子音連續と捉へられるといふ新しい提案をする。さらに4節では朝鮮語における音節末子音の實現の仕方に關する一般的な規則との關聯を論じる。基底の子音連續には媒介母音が起こるものと媒介母音が起こらないものがあること、および、両者は音連續の種類として異なることを示すと同時に、媒介母音の現象以外にも表面の音節構造の導出過程で音節の組み替へが起こる證據があることを指摘する。5節では *u* に關する變則用言、6節では *u* に關聯するその他の事柄について論じる。

## 2 挿入説でなければいけない理由

媒介母音の出沒の説明として母音削除説を取る場合に、平行する現象、類似の現象の存在が傍證として利用されてゐる。

まづ、形態素内の母音衝突を解決するために任意の *u* 脱落が起こることがある。

- (5) a. mauu~mam 「心」  
b. tipuiti~tipiti 「DVD」

<sup>\*2</sup> 周時經 (1910: 101-102) の言及は今日的な視點からは體系的とは言へない。しかし、名詞化の-mの接續について、-mの前に *u* が加へられるのは子音語幹の後では「子音が二つともあると發音するにかたい」こと、「またその音形の變化を防がんとする」ものであることを述べてをり、その分析の方法は明らかに挿入母音説である。

上の例では基底の形式はそれぞれ前者、すなはち maum、tipuuti など **u** をもつ音形の方であることが確實であり、媒介母音の母音削除のプロセスが存在するとすれば、それに平行する現象と言へる。しかし、すでに姜昶錫 (1982) が指摘してゐるやうに、上記の母音削除は任意であるが媒介母音の母音削除は義務的であり、規則の性質が全く同じとは言へない。それどころか規則の順を検討すると、両者が異なるプロセスであることは明らかである。次の例を見よう。

(6) a. po-ni<sup>?</sup>ka (\*po-u-ni<sup>?</sup>ka) ← //po+(u)ni<sup>?</sup>ka// 「見るから」

b. no-u-ni<sup>?</sup>ka~no:-ni<sup>?</sup>ka ← //no<sup>h</sup>+(u)ni<sup>?</sup>ka// 「置くから」

削除説によつて記述をすると、(6a) では媒介母音の義務的削除が起こるのに對し、(6b) では用言語幹末の <sup>h</sup> により媒介母音の義務的削除は起こらない。ただし、用言語幹末の <sup>h</sup> は後続の母音により削除される\*<sup>3</sup>。(6b) の變異はその後任意の **u** 削除及び代償延長によつて説明されることになる。つまり、媒介母音の義務的削除は用言語幹末の <sup>h</sup> 削除規則の前に順序づけされてをり、任意の **u** 削除は用言語幹末の <sup>h</sup> 削除規則後に順序づけされてゐる。同じく母音衝突の回避を目的とする同一の規則が、ある段階で義務的に、別の段階で任意に適用されるといふことになつてしまふ。このやうな二つの規則が互ひの傍證になるとは思へない。

削除説の傍證としてつぎによく擧げられる形式は、「**u** 變則」の用言語幹に連用形接尾辭が後続する語形である。これが引き合ひに出される場合、「**u** 變則」の用言語幹が語幹末に **u** を基底で持つてをり (例へば k<sup>h</sup>u- 「大きい」)、母音の後続 (例へば連用形接尾辭の- $\Delta$  の後続) により語幹末の **u** が義務的に削除される (7) といふ分析を論證なしに前提とすることが多い。

(7) k<sup>h</sup> $\Delta$  (k<sup>h</sup>u +  $\Delta$ ) 「大きくて (連用)」

しかし、のちに述べるやうに「**u** 變則」の用言語幹が語幹末に **u** をもつのかどうかは自明ではない。これを **u** 脱落現象ではなく **u** 挿入現象と考へることができるため削除説の決定的な證據にはならない。削除説を支へる證據にも挿入説を支へる證據にも使へる現象である。

最後に類似する現象として母音衝突をきつかけとする **u** 以外の母音の脱落現象がある。つぎに連用形形成における母音脱落を例として擧げる。

\*<sup>3</sup> 用言語幹末の <sup>h</sup> は、實は、抽象度の高い假定に基づくものであり、音素 <sup>h</sup> で實現されることはない。これを <sup>h</sup> と考へるのはよく受け入れられた假説であり、本稿では <sup>h</sup> として採用することにする。

- (8) a. se $\Delta$ ~se (se +  $\Delta$ ) 「数へて (連用)」任意の母音脱落  
 b. sa (sa +  $\Delta$ ) 「立つて (連用)」義務的な母音脱落  
 c. ka (ka + a) 「行つて (連用)」義務的な母音脱落

母音衝突回避のための母音脱落はたしかにあると言へるが、任意、あるいは義務的に適用される別々の規則であり、媒介母音削除規則が存在する直接の證據とは言へない。

これに對し、母音挿入説には有利な點がある。まづ、平行する現象として、借用語に現はれる挿入母音 u がある。

- (9) a. t<sup>h</sup>ul $\Delta$ k 「トラック」  
 b. t<sup>h</sup>i $\Delta$ t $\Delta$ u 「チーズ」

借用語の例は、朝鮮語において母音 u が音節構造の改善のために挿入されるデフォルトの母音であることを示してゐる。

母音挿入説に有利でかつ母音削除説に決定的に不利なのは用言 1 語幹の振る舞ひである。複数の點で媒介母音と關聯する現象なので、以下に詳しく記述する。

語幹末に 1 を持つ用言は以下の接尾辭が後續する際、語幹末の 1 を失ふ\*4。

- (10) a. 子音一つからなる接尾辭  
 b. 子音連続に始まる接尾辭  
 c. n, s に始まる接尾辭

このうち (10a) と (10b) は 1 語幹用言のみに起こる特別の現象と考へる必要がないが、(10c) は 1 語幹用言のみに起こる特有の 1 脱落と言へる。まづ、次にそれぞれの例を擧げる。

- (11) a. 1. //sal+l//→sal 「生きる (未來連體)」  
 2. //sal+m//→sam 「生きること」\*5  
 b. 1. //sal+pnita//→sap.ni.ta 「生きます (上稱)」  
 2. //sal+l<sup>?</sup>ka//→sal.<sup>?</sup>ka 「生きるだらうか」  
 c. 1. //sal+na//→sa.na 「生きるが、生きるのか」  
 2. //sal+si+pnita//→sa.sip.ni.ta 「ご存命です」

\*4 本稿では、例へば「生きる」の語幹交替 sal~sa-において 1 をもつ sal-が基本的な解釋と見るので 1 脱落として記述する。またそのやうな記述がより一般的である。Martin(1954:32) などのやうに sa-を基本形式と見る 1 添加説もあるが、そのやうな考へ方に沿ひ 1 出現を音韻的に説明するのは難しい。

\*5 正書法では實現音聲に拘はらず基底形 salm で書く。

(11a) と (11b) は全て、語幹末の 1 に続いて接尾辭初頭に音節末音として實現すべき分節音が來る例である。つまり、追加末音の後續により、基底で音節末子音連續ができる例である。ところが、朝鮮語の音節構造は子音を C、接近音を G、母音を V とするとき (C)(G)V(C) と定式化することができ、音節末には最大一つの子音しか現はれえない。(12a) のやうに、基底の子音連續が音節末に來る際、調音位置に違ひがあれば [-cor] の分節音が、ソノリティに差があればソノリティのより大きい分節音が一つ選ばれて實現するといふ一般的な法則が朝鮮語では成り立つ (4 節にて論じる)。(11a) も (11b) もその規則に従つてゐるもので、これらは 1 語幹に特有の振る舞ひではない\*6。

また、基底で語末子音連續をもつ語に母音始まりの接尾辭が續く時、再音節化を経て、音節境界をまたいだ子音連續が實現しえる。この振る舞ひは、通常の語末子音連續 (12a) にも 1 語幹に追加末音が加はる構成 (12b) にも共通に見られる。つぎに例を擧げる。

- (12) a. 1. //kap<sup>2</sup>s//→kap 「値」  
           2. //kap<sup>2</sup>s+i//→kap.<sup>2</sup>si 「値が」  
       b. 1. //sal+m//→sam 「生きること」  
           2. //sal+m+i//→sal.mi 「生きることが」

n, s の後續による 1 脱落は、共時規則としては用言語幹と接尾辭の連續にしかたてられない\*7。n, s は自然類をなさないので次のやうな形態音韻規則が存在することになる。

- (13) 1 → ∅ / \_\_\_\_ ]<sub>VERB STEM</sub> + [ <sub>VERB SUFFIX</sub> n, s

さて、他の子音を語幹末に持つ用言と違ひ、1 語幹と接尾辭の間には媒介母音が起こらない\*8。つぎは (14a) が子音語幹、(14b) が 1 語幹、(14c) が母音語幹の例であり、それぞれに媒介母音系接尾辭である過去連體の-(u)n が後續する例である。

- (14) a. mAk+(u)n→mAkum 「食べた (連體)」  
       b. sal+(u)n→san 「生きた (連體)」  
       c. ka+(u)n→kan 「行つた (連體)」

\*6 姜祖錫 (1982:28)、배주채 (2008:110) でも「子音群單純化」による 1 の消失と 1 語幹に n, s が後續する際の形態的「1 脱落」を區別してゐる。배주채 (2008:110) によるとこの區別は이명근 (1981) に始まる (筆者未見)。

\*7 1 脱落は歴史的にはより廣範圍に起こつたものでいくつかの複合語に化石的に見られる。ただし、條件も異なり (n, t, tc, s の後續による 1 脱落)、また全ての場合に適用されないためその性格が語彙的である (이동석 2005: 109-157)。

\*8 すでに多くの指摘がある通り、1 語幹と接尾辭の間に媒介母音を起こす非標準形が存在する。ここでは標準形をまづ扱ふ。

(14b) のやうに 1 語幹と接尾辭の間には媒介母音が起らないため、*u* 脱落説によると 1 語幹を條件とする *u* 脱落を假定せねばならない。しかし、1 に後續する *u* がなぜ脱落するのか、その動機は音聲的に不自然である(姜昶錫 1982:20-21、배주채 2008:73-74)。また、上の *san* 「生きた」のやうに 1 脱落まで起こす場合は次のやうな音變化を想定することになる。

(15) *sal+uun*→*sal+n*→*san*

上の最初の *u* 削除の導出過程では、わざわざ音節末子音連続 *ln* をもつ不適格な音節を生じさせ、そのあと音節末子音連続を解決することになる。このやうな不自然な過程は、もし挿入説が成立するならば、想定する必要がない(cf. 姜昶錫 1982)。

挿入説を取れば媒介母音は語幹末子音が [+cons, -lat] 素性を持つ場合に現はれると言へる。そのため少なくとも出現環境のうち先行の要素は母音挿入の條件として自然である。問題は媒介母音の後續環境にある。次節でそのことを扱ふ。

### 3 音節構造を條件と見る媒介母音の挿入母音解釋

#### 3.1 先行研究の問題點

媒介母音の挿入説をとる姜昶錫(1982)はこの立場にとつて重要な視覚と問題點をいくつも指摘してゐる。挿入規則が「音聲連結が不可能な子音結合を防止し不自然な音節構造を改善するためのもの」(p37)と考へる點は本稿の考へ方と完全に一致する。しかし、姜昶錫(1982: 34)のたてた母音挿入規則は次のやうなものであり、削除説を取る論者を説得しきれなかつた。

$$(16) \emptyset \rightarrow u / \begin{matrix} \left[ \begin{matrix} +\text{cons} \\ -\text{voc} \end{matrix} \right] \\ \text{stem} \end{matrix} + \begin{matrix} \left[ \begin{matrix} +\text{cons} \\ +\text{cont} \end{matrix} \right] \\ \text{ending} \end{matrix}$$

上の規則の第一の問題點は、ここで [+cons, +cont](ending) が *n, m, l, s* に共通し *t, tɕ, k* などに見られない素性として擧げられてゐることである。つまり、鼻音 *m, n* などを [+cont] として扱つてゐるが、*m, n* は鼻閉鎖音/鼻破裂音であり、一般に [-cont] とされるものである。普通にたてられる辨別素性では *t* と區別される *n, m, l, s* は自然類をなさない。*n, m, l, s* を結びつける素性は [+cons] のうち [-cont, -son] でないもの、つまり [+cont, +cons] あるいは [+son, +cons] とでも言ふしかなささうである。なほ、辨別素性でなければ *n, m, l, s* はソノリティが大きい部類の音であり、その點で *t, tɕ, k* と對照的である。

第二の問題点は、本人も述べてある通り、「s, n で始まる語尾の中には [この規則に] 従はない例外が見つかる」こと、それもかなり多くの例外が出ることである。第三の問題点は、p 始まり、o 始まりなどの語尾が無視されてをり (p33)、全てのケースをカバーできていないことである。

本稿では少なくとも例外がほぼない規則を立てることからはじめ、全てのケースをカバーするための假説を立てることとする。姜昶錫 (1982) 以外にも挿入母音説を取るものがあるが、それらの先行研究については §3.4 で批判する。

### 3.2 媒介母音と音節構造

まず、事実関係を確認し、具体的に諸形式を再検討したい。媒介母音は次の環境に必ず出る。

- (17) a. 1 以外の子音を語幹末にもつ用言 (子音語幹用言) の後  
 b. 特定の接尾辭の前

媒介母音の出没する特定の接尾辭を媒介母音系接尾辭と呼ぶ。媒介母音系接尾辭の特徴を他の接尾辭と比較する必要がある。文法接尾辭の形態的振る舞ひの記述は小学館の『朝鮮語辞典』の分類にかなり網羅されてある。『朝鮮語辞典』では文法接尾辭を五類に分類する。つぎに主要な接尾辭の例の分類を挙げる<sup>49</sup>。

- (18) 1 類 -ta 基本形, -ta 下稱平敍 [形指存], -tako 平敍引用體 [形存], -tan 回想連體 [動], -tan 過去連體 [形指存], -tani 過去不測繼起, -tani 回想下稱疑問, -tanja 回想下稱疑問, -tanila 回想下稱文語平敍, -tanika 回想等稱疑問, -tanka 回想等稱疑問, -tante 回想前置, -tantci 回想疑念, -twe~~utwe 逆接, -lako 平敍引用體 [指], -lokuna 感心 [指], -kuna 感心 [形指存], -ko 竝列, -ke 樣態・程度, -ke 等稱命令, -ke<sup>2</sup>s- 未來補助語幹, -katun 根據, -tci 確認, -tci 否定接續, -tea 下稱勸誘, -tca 勸誘引用體
- 2 類 -nun 現在連體 [動存], -nunte 前置 [動存], -nuntci 疑念 [動存], -nunika 等稱疑問 [動存], -nunika 詠嘆 [動存], -nunika 感心 [動], -(nu)nta 下稱平敍 [動], -(nu)ntako 平敍引用體 [動], -nunila 下稱文語平敍 [動存], -nunja 下稱疑問 [動存], -nja 下稱口語疑問, -ni 下稱疑問 [動存], -nunjako 疑問引用體 [動存], -(<sup>2</sup>su)pnita 上稱平敍, -(<sup>2</sup>su)pni<sup>2</sup>ka 上稱疑問, -ne 等稱平敍・發見, -se 等稱勸誘, -(<sup>2</sup>s)o 中稱, -(<sup>2</sup>sa)op- 美化

<sup>49</sup> 接尾辭の提示にあつてはその機能については主に小学館『朝鮮語辞典』の記述により簡単なラベルを付した。朝鮮語の用言は形態的な振る舞ひから動詞、形容詞、指定詞、存在詞のサブグループに分けられる。それぞれ略號を [動]、[形]、[指]、[存] とし、特定の用言サブグループに後續する接尾辭の場合、機能ラベルのあとに付してある。



3 類 -(u)si- 尊敬, -(u)sip<sup>2</sup>sio 尊敬上稱命令, -(u)sip<sup>2</sup>sako 尊敬上稱命令引用, -(u)sos<sup>2</sup> 懇願, -(u)ni 不測繼起, -(u)ni<sup>2</sup>ka 不測繼起, -(u)n 現在連體 [形指], -(u)n 過去連體 [動], -(u)nte 前置 [形指], -(u)ntçi 疑念 [形指], -(u)nka 等稱疑問 [形指], -(u)nk<sup>2</sup>l 詠嘆 [形指], -(u)nila 下稱文語平綴 [形指], -(u)nja 下稱疑問 [形指], -(u)ni 下稱疑問 [形指], -(u)njako 疑問引用體 [形指], -(u)l 未來連體, -(u)l<sup>2</sup>ka 推量疑問, -(u)l<sup>2</sup>k<sup>2</sup>l 推量詠嘆, -(u)l<sup>2</sup>tçi 推量疑念, -(u)l<sup>2</sup>ke 略待約束, -l<sup>2</sup>se 等稱斷定 [指]\*<sup>10</sup>, -(u)l<sup>2</sup>sulok 比例, -(u)p<sup>2</sup>sita 上稱勸誘, -(u)o 中稱, -(u)op- 美化

4 類 -(u)m 名詞化, -(u)mj<sup>2</sup>l 列舉, -(u)mj<sup>2</sup>an 條件, -(u)mj<sup>2</sup>ansa 同時, -(u)mu<sup>2</sup>lo 原因, -(u)ma 下稱約束\*<sup>11</sup>, -(u)mse 等稱約束, -(u)l 目的, -(u)lila 推量下稱文語平綴, -(u)lja 推量下稱疑問, -(u)lja 意圖, -(u)ljako 意圖, -(u)lako 命令引用體, -(u)i 等稱平綴 [形]\*<sup>12</sup>

5 類 -<sup>2</sup>l/ajo 略待上稱, -<sup>2</sup>l/a 略待, -<sup>2</sup>l/aja 義務, -<sup>2</sup>l/a<sup>2</sup>s- 過去, -<sup>2</sup>l/as<sup>2</sup> 原因, -<sup>2</sup>l/ala 下稱命令

1 類と 2 類は非媒介母音系、3 類と 4 類は媒介母音系、5 類は接尾辭初頭音が母音交替を起こすものである。5 類を母音交替形と呼ぶ。1 類と 4 類が 1 語幹に後續すると 1 脱落を引き起こすが、2 類と 3 類は 1 脱落を引き起こさない。

媒介母音系 (小學館の 3 類と 4 類) とその他の接尾辭の初頭音を比べると、次のことが分かる。

- (19) a. 子音一つからなるものは全て媒介母音系である (例: -(u)n 現在連體 [形指], -(u)n 過去連體 [動], -(u)l 未來連體, -(u)m 名詞化)
- b. 子音連続に始まるものは全て媒介母音系である (例: -(u)nte 前置 [形指], -(u)ntçi 疑念 [形指], -(u)nka 等稱疑問 [形指], -(u)nk<sup>2</sup>l 詠嘆 [形指], -(u)nila 下稱文語平綴 [形指], -(u)l<sup>2</sup>ka 推量疑問, -(u)l<sup>2</sup>k<sup>2</sup>l 推量詠嘆, -(u)l<sup>2</sup>tçi 推量疑念, -(u)l<sup>2</sup>ke 略待約束, -(u)l<sup>2</sup>sulok 比例, -(u)p<sup>2</sup>sita 上稱勸誘, -(u)mse 等稱約束)

用言 1 語幹の 1 脱落について述べた時に同様の環境に言及したことを想起されたい (10a, b)。これらの接尾辭群の初めの子音は音節末音として實現しようとするものと考えられる。そして、これらの接尾辭はすべて媒介母音系である。そこで、1 以外の子音を語幹末に持つ用言に追加末音をもたらす接尾辭が後續すると <sup>2</sup>l が挿入されると言へる。以下では「.」で

\*<sup>10</sup> -(u)l<sup>2</sup>se 等稱斷定 [指] は指定詞に後續する形式なので子音語幹に先行されることがなく、媒介母音を生じさせる環境に置かれることはないと思はれる。そこで小學館の方針では 1 類に分類されるべきところ、誤記されたものと思はれる。

\*<sup>11</sup> 배주채 (2008: 346) では 1 語幹に -(u)ma 下稱約束が後續すると 1 脱落が起ることとしてをり、小學館の 3 類にあたる振る舞いを記述してをり、たしかに 1 脱落形が觀察される。本稿の方針で扱えない例外になる。

\*<sup>12</sup> -(u)i が小學館の記載通り 4 類であるならかなり特殊な接尾辭である。この接尾辭は用例も少なく、今の世代の話者は語形變化に困難を感じるやうで、現代語におけるその振る舞いを確實にはつかめてゐないが、他の媒介母音系と全く異なるものである可能性が高い。1 語幹のあとで <sup>2</sup>l を維持するやうだからである。

音節境界を示す\*13。

(20)  $\emptyset \rightarrow \text{u} / [+cons, -lat]]_{\text{VERB STEM}} \_\_\_\_\_\_ [_{\text{VERB SUFFIX}} [+cons]]$ .

これは基本的に例外無く適用される規則と考へてよいが、いくつか但し書きが必要である。つぎにそのことを述べる。

小學館に従ひ **u** が接尾辭の異形態を形作るものとして記述すると、朝鮮語においては用言接尾辭の異形態が長短の二形式ある場合、子音語幹用言のあとで長い形が出、母音語幹と1語幹用言のあとで短い形が出ることが指摘できる。(21) はそれぞれ子音語幹、1語幹、母音語幹の例であり、それらに(22)の三種の接尾辭(長形を形作る部分を括弧に括つてある)がついた例を(23)に挙げる。

(21) pat- 「もらふ」、sal- 「生きる」、po- 「見る」

(22) a. -(u)n 過去連體 [動]

b. -(<sup>2</sup>sui)pnita 上稱平絛

c. -(nu)nta 下稱平絛 [動]

(23) a. pat-um 「もらつた(連體)」、sa-n 「生きた(連體)」、po-n 「見た(連體)」

b. pat-supnita 「もらひます」、sa-pnita 「生きます」、po-pnita 「見ます」

c. pat-nunta 「もらふ」、sa-nta 「生きる」、po-nta 「見る」

(23a) が媒介母音系の例であり、(23b, c) は非媒介母音系の接尾辭がついた語形に見られる現象である。ともに長形・短形の交替として類似の現象と捉へることができる。本稿の主張は媒介母音系の接尾辭について短形を基底形とするものである。しかし、非媒介母音系の接尾辭についても短形を基底形と考へると、先に示した **u** 挿入規則(20)ではなく(23b, c)は **sui** 挿入や **nu** 挿入が起こる例外となつてしまふ。これらは少数の特定接尾辭のみにみられる現象である。**sui** 出沒は、よく使はれる接尾辭に-supnita~pnita(上稱平絛)と-supni<sup>2</sup>ka~pni<sup>2</sup>ka(上稱疑問)、及び出現頻度は低いが<sup>3</sup>-sup<sup>2</sup>t<sup>2</sup>cio~p<sup>2</sup>t<sup>2</sup>cio(中稱確認)、-sup<sup>2</sup>tita~p<sup>2</sup>tita(中稱回想平絛)、-sup<sup>2</sup>ti<sup>2</sup>ka~p<sup>2</sup>ti<sup>2</sup>ka(中稱回想疑問)がある。**nu** 出沒は-nunta~nta(下稱平絛)とその引用などの關聯形式のみに見られる現象である。これらの形式の短形はそれぞれの基底形ではないと考へられる。豫測不可能な出沒音形は媒介母音の問題とは切り離して考へるべきである。なほ、上稱の平絛、疑問については非標準的な形

\*13 本稿では音節末音の指定といふことを、音節境界の指定で表示する。しかし、表示の仕方自體も今後検討の對象としたい。

に-*uɸnita*~*pnita*(上稱平敍)と-*uɸni<sup>2</sup>ka*~*pni<sup>2</sup>ka*(上稱疑問)があり、短形を基底とするバリエーションでは媒介母音が出ると言へる。

以上のやうに、音節構造の観点から極めて音韻的なプロセスとしての母音挿入を考へることが可能であり、それにより媒介母音が説明できる例は多い。

### 3.3 媒介母音と特定の後續音

つぎに、*m*, *l*, *o* 始まりのもの用言文法接尾辭のうち、子音語幹に後續する可能性のあるものは全て媒介母音系であるといふことが言へる。以下の諸形式が該當する(先の追加末音系の接尾辭と重複するものは擧げない)。

- (24) a. *-(u)l*<sub>Δ</sub> 目的, *-(u)lila* 推量下稱文語平敍, *-(u)lja* 推量下稱疑問, *-(u)lja*<sub>Δ</sub> 意圖, *-(u)lja<sub>ko</sub>* 意圖, *-(u)lako* 命令引用體  
 b. *-(u)mj<sub>Δ</sub>* 列擧, *-(u)mj<sub>Δn</sub>* 條件, *-(u)mj<sub>Δns</sub>*<sub>Δ</sub> 同時, *-(u)mu<sub>lo</sub>* 原因, *-(u)ma* 下稱約束  
 c. *-(u)o* 中稱, *-(u)op-* 美化

*l* を初頭音にもつ接尾辭の中には以下のやうに媒介母音を引き起こさないものもあるが、これらは用言の中でも指定詞 (*-i* 「である」と *ani-* 「でない」) のみに後續するものである。指定詞には子音終りの語幹がないため、媒介母音が起こる環境に置かれることがない。

- (25) *-lako* 平敍引用體 [指], *-lokuna* 感心 [指], *-l<sup>2</sup>se* 等稱斷定 [指]

しかし、*m*, *l*, *o* は音韻的には他の音と區別される自然類をなすとは言へない。そこで、*m*, *l*, *o* を條件とする音韻規則は立てにくい。

媒介母音系に見られない接尾辭初頭音もある。*k*, *t*, *te* はじまりのもの用言文法接尾辭には媒介母音系がない。

*-twe*~*-utwe* 逆接の變異は媒介母音系と通ずるやうに見えるが、この初頭の *u* の出現條件は媒介母音のやうに子音語幹用言の先行を條件とするものではない。小學館『朝鮮語辭典』は「存在詞の子音語幹および時制補助語幹につくときは」*u* が現はれると述べてをり、卍주채 (2008: 346) も同一趣旨の記述をしてゐる。금성 국어대사전第2版では「*‘i<sup>2</sup>s’*, *‘ps’* で終はる語幹や *‘a<sup>2</sup>s/a<sup>2</sup>s-*, *‘ke<sup>2</sup>s-* のあとに」*u* が現はれると述べる。單獨の *ʔs* を形式末にもつ形態素は存在詞語幹 *i<sup>2</sup>s-* 「ある」、時制補助語幹 *-<sub>Δ</sub>/a<sup>2</sup>s-* 過去および *ke<sup>2</sup>s-* 未來の三つのみであり、*p<sup>2</sup>s* を語幹末にもつ用言は存在詞語幹 *ap<sup>2</sup>s-* 「ない」及び形容詞語幹 *kajap<sup>2</sup>s-* 「可哀想だ」の二つのみである。このほかには *ʔs* を *u* に先行する位置にもつ形態素が存在しないやうである。*kajap<sup>2</sup>s-* の後では *u* が現はれる形式が強く好まれるやうであるから、*-utwe*

といふ形式が出るのは<sup>?</sup>sが先行する時と言へる。このuは媒介母音とは別に処理すべき、形態音韻的な挿入母音と考へられる。

接尾辭初頭音のうちn, sは媒介母音系と非媒介母音系の兩者にまたがる分布を示す。

- (26) a. n 始まりの非媒介母音系接尾辭: -num 現在連體 [動存], -nunte 前置 [動存], -nuntei 疑念 [動存], -numka 等稱疑問 [動存], -numkaI 詠嘆 [動存], -numkuna 感心 [動], -(nu)nta 下稱平絃 [動], -(nu)ntako 平絃引用體 [動], -numila 下稱文語平絃 [動存], -nunja 下稱疑問 [動存], -nja 下稱口語疑問, -ni 下稱疑問 [動存], -nunjako 疑問引用體 [動存], -ne 等稱平絃・發見
- b. n 始まりの媒介母音系接尾辭: -(u)ni 不測繼起, -(u)ni<sup>?</sup>ka 不測繼起, -(u)n 現在連體 [形指], -(u)n 過去連體 [動], -(u)nte 前置 [形指], -(u)ntei 疑念 [形指], -(u)nka 等稱疑問 [形指], -(u)nkai 詠嘆 [形指], -(u)nila 下稱文語平絃 [形指], -(u)nja 下稱疑問 [形指], -(u)ni 下稱疑問 [形指], -(u)njako 疑問引用體 [形指]
- c. s 始まりの非媒介母音系接尾辭: -se 等稱勸誘
- d. s 始まりの媒介母音系接尾辭: -(u)si- 尊敬, -(u)sip<sup>?</sup>sio 尊敬上稱命令, -(u)sip<sup>?</sup>sako 尊敬上稱命令引用, -(u)sosa 懇願

### 3.4 媒介母音系接尾辭のもつ形態音韻 情報の性質

接尾辭の始まりの音形は、媒介母音の出沒如何とたしかに關聯してゐる。本節のこれまでの検討をまとめると、以下の通りである。

- (27) a. つぎの音形をもつものは全て
1. 子音一つからなるもの
  2. 子音連続に始まるもの
  3. m, l, o 始まりのもの
- b. つぎの音形をもつものはない: k, t, tɕ はじまり
- c. つぎの音形をもつ場合は媒介母音は語彙情報とするしかない: n, s

以上の通り、媒介母音の出現する後續要素には一部音韻的な特徴があると言へるが、一部は接尾辭ごとに指定された形態的な情報といふことになる。しかし、形態的な情報とはどのやうなものであろうか。用言子音語幹が先行する場合母音を出現させる性質を、なんらかの音韻的なことがらに關聯させる手立てはないのだろうか。

신승용 (2007:155-179) は媒介母音系接尾辭の初頭に CV 層における空の V スロットを假定し、以上のやうな問題に挿入母音説の立場から答へようとする。しかし、この試みには

問題がある。第一に、空の V スロットは母音語幹や 1 語幹が先行する際に削除されなければならない (p173) など、實質的に母音削除説と全く變はず、それどころか空のスロットに *u* が挿入される過程が増える分、仕組が複雑になつてしまふ。第二に、なぜそのやうな空のスロットが存在するのか不明である。第三に、(20) のやうな明らかに音韻過程として説明できる部分を捉へてをらず、また關聯付けてみない。

Hong (2003) は最適性理論の枠組みによる媒介母音の挿入母音解釋を行なつた。議論の流れはソノリティが小・大の順の子音連続への母音挿入を説明した上で、*nuu* で始まる終結接尾辭が全て非媒介母音系であることに注目して、ALIGNLEFT-N<sub>IND</sub> (Align the left edge of /n/-initial indicative suffix, N<sub>IND</sub>, with the left edge of a syllable) といふ形態素限定の制約を導入し、これらの接尾辭に媒介母音を起こさせない理由とした。Hong (2003) の問題は、第一に、特定の接尾辭が媒介母音を起こさないといふのは音韻的な分析といふより單なる形態的な事實である點である。Hong (2003) の第二の問題は、全ての非媒介母音系の接尾辭について説明してゐないことである。もし説明しようとするれば、非媒介母音系の接尾辭が要する形態的なラベルの数だけ特殊な制約が必要になる。

媒介母音系接尾辭がもつ形態的な情報の性質について、ここで結論先取的に提案を行なひたい。媒介母音が出没する接尾辭の初頭子音は全て音節末音の指定を受けてみると想定する。例へば、つぎのやうにである。

- (28) a. *-n.ka* 等稱疑問 [形指]  
 b. *-n.ja* 下稱疑問 [形指]

基底の音節境界は表層でそのまま實現される場合もあり、さうでない場合もある。このこ

	<i>tɕop+n.ka</i>	<i>tɕop+n.ja</i>
	「狭いのか」	「狭いのか」
音節化	<i>.tɕopn.ka.</i>	<i>.tɕopn.ja.</i>
<i>u</i> 挿入	<i>.tɕopun.ka.</i>	<i>.tɕoptun.ja.</i>
再音節化	<i>.tɕo.pun.ka.</i>	<i>.tɕo.pu.nja.</i>
他の規則	省略	省略
	[ <i>.tɕo.bun.ga.</i> ]	[ <i>.tɕo.bu.nja.</i> ]

表 1 挿入母音と再音節化

とで *o* 始まり以外の媒介母音系接尾辭の振る舞ひについて、一貫した説明を與へることが可能である。

この基底の音節境界は形態音韻的に必要となる単位の境界であり、多くの場合、形態分析上の正當化が可能である。まづ、つぎの表に關聯形式がシステムをなす用言接尾辭群を擧げる(この表では媒介母音系接尾辭の初頭に (w) を示しておく)。

	現在		回想	未來
	動詞後續形	形容詞後續形		
連體	[動]-num	[形]-(w)n	[用]-tʌn	[用]-(w)l
下稱疑問	[動]-numja	[形]-(w)nja	[用]-tʌnja	[用]-(w)lja
等稱疑問	[動]-numka	[形]-(w)nka	[用]-tʌnka	[用]-(w)l <sup>2</sup> ka
疑念	[動]-numtci	[形]-(w)ntci	[用]-tʌntci	[用]-(w)l <sup>2</sup> tci
詠嘆	[動]-numkʌl	[形]-(w)nkʌl	[用]-tʌnkʌl	[用]-(w)l <sup>2</sup> kʌl
下稱文語平敘	[動]-numila	[形]-(w)nila	[用]-tʌnila	[用]-(w)lila
下稱疑問	[動]-ni	[形]-(w)ni	[用]-tʌni~ti	—
前置	[動]-numte	[形]-(w)nte	[用]-tʌnte	—
不測繼起	[用]-(w)ni		[用]-tʌni	—

表2 關聯形式がシステムをなす用言接尾辭群

例へば、先の-n.ja(28b) は最終實現形では必ず [(w).nja] と音節化されるが、表に見える通り、-(w)n, -(w)nka, -(w)ntci, などに現はれる n という要素に [動]-numja, [用]-tʌnja, [用]-lja に現はれる ja という要素が後續したものであることは明らかである。これらの分節された形式には一定の意味を與へがたい。そこで、傳統的な意味での形態素と言ふことは躊躇はれるかもしれない。しかし、Aronoff(1976) が早くに提案した通り、形態音韻論の對象とすべき現象には、傳統的な形態素よりも小さな形態的單位をめぐるものも多い<sup>\*14</sup>。本稿では Aronoff 流に、このやうな單位を含めて形態素と呼ぶことにする。Cranberry 形態素を通常の形態素と同様に扱ふ方針と言つても良い(スチ 2010 も同様の立場から別の現象を扱つた

\*14 Aronoff(1976: 15) は形態素の定義について次のやうに述べる。‘The morpheme is traditionally defined as the minimal sign: an arbitrary constant union of sound and meaning. This definition must be adjusted to include such morphemes as *mit*, (引用者註 permit, permission, permissive, remit, commit, demit... の *mit*) which have no constant meaning. Now, *mit* is clearly a constant phonetic string (at the level of the input to the phonology). It is also arbitrarily linked to something. However, it is linked not to a meaning but to a phonological rule, the rule which changes *t* to *s* before *+ion*, *+ive*, *+ory*, and *+or*, only in the morpheme *mit* (cf. *vomitory*, *\*vomissory*). The original definition of the morpheme has three aspects: constant form, arbitrary link, constant meaning. In order to include *mit* in the class of morphemes, we need only broaden the third, that of constant meaning, to include a phonological operation as well. This broadened definition will allow us to include *stand* and *take* also. The rule to which they are arbitrarily linked spells out the past tense.’

ものである)。

Cranberry 形態素とは言つても相當に意味・機能の明確なものもある。この考へ方で必要となる主要な単位のうち媒介母音の直後に現はれる形式を (29) に、非媒介母音系の形式を (30) に挙げる。またそれらに更に後續する形式を (31) に挙げる。

- (29) a. n: REALIS [形指]  
b. l(ʔ): IRREALIS  
c. m: 名詞化、約束  
d. s+i: 尊敬 + 述語化 (?)  
e. p: 待遇

- (30) a. num: REALIS [動存]  
b. tan: 回想

- (31) a. ja: 下稱疑問  
b. ka: 等稱疑問  
c. tci: 疑念  
d. kAl: 詠嘆  
e. ila: 下稱文語平叙  
f. i: 下稱疑問  
g. te: 狀況  
h. i: 不測繼起  
i. iʔka: 不測繼起

以上の分析とよく似た、もう一つの可能性に、接尾辭の初頭音は特別な指定がない限り、音節末音として實現するといふ解釋がある。その解釋では通常言はれてゐる形態素の概念を規定し直す必要がないといふ利點があるが、なぜ接尾辭初頭音が音節末音として實現したがるのか不明であるため本稿ではこれを取らないこととする。

媒介母音系の接尾辭のはじめ子音が音節末音として實現されるやうに指定されてゐることを提案した。それでは非媒介母音系、母音交替系の接尾辭は基底の音節構造を持つのだろうか。このことについて最後に論じる。

非媒介母音系、媒介母音系、母音交替系の接尾辭を次の三つで代表させる。

- (32) a. -tci (非媒介母音系)

b. -mj $\Delta$ n (媒介母音系)

c. -a (母音交替系)

音節構造についてはそれぞれ、非媒介母音系は先頭に音節境界を持つものとして、媒介母音系ははじめの子音の直後に音節境界を持つものとして、母音交替系ははじめの母音の前に音節境界をもたないものとして捉へるのが良いと考へる。

(33) a. -.tci (非媒介母音系)

b. -m.j $\Delta$ n (媒介母音系)

c. - $\Delta$ /-a (母音交替系)

母音交替系接尾辭は、子音語幹用言および1語幹用言に後續する際、必ず用言語幹末の子音を音節初頭音とする。

(34) a. m $\Delta$ .k- $\Delta$  「食べて (連用)」

b. pa.t-a 「もらつて (連用)」

c. u.l- $\Delta$  「泣いて (連用)」

前舌母音に終はる用言語幹に後續すると任意でjを音節初頭音としてとるか<sup>\*15</sup>、縮約・融合形を作る。

(35) a. n $\epsilon$ -(j) $\Delta$ ~n $\epsilon$  「出して (連用)」

b. t $\emptyset$ -(j) $\Delta$ ~tw $\epsilon$  「なつて (連用)」

a,  $\Delta$  で終はる用言語幹は連用形で義務的な縮約を起こす。

(36) a. ka 「行つて (連用)」 ←ka+a

b. s $\Delta$  「立つて (連用)」 ←s $\Delta$ + $\Delta$

これらの現象は、全て母音交替系の接尾辭が音節初頭音を他の形式に求める傾向と見ることができ、母音交替系接尾辭が基底形初頭に音節境界を持たないことを示唆してゐる。

一方、非媒介母音系接尾辭は全てが常に、接尾辭初頭が音節初頭として實現する。基底に音節境界指定がされてゐるとすれば、接尾辭初頭に境界が設けられてゐると考へて良い。この假定は音節化の過程の考へ方によつては不要である。しかし、先の媒介母音の扱ひでは、媒介母音系接尾辭が音節境界指定を受けてゐるとした。すると媒介母音系接尾辭のみ

<sup>\*15</sup> 韓國のつづりではjを表記しないが、共和國のつづりではjを表記する。



が音節境界指定を受けてみると考へるよりも多くの形態素に基底の音節構造があると考へる方が自然である。後に論じる *ui* 變則等の分析では非媒介母音系の接尾辭の先頭に音節境界が必要になる。

### 3.5 まとめ

ここでの提案は形態素の基底形に多くの場合音節構造が指定されてみると仮定し、媒介母音の出現環境を (17) からつぎに修正するものである。

- (37) a. 1 以外の子音を語幹末にもつ用言 (子音語幹用言) の後  
b. 初頭に末音指定された子音をもつ接尾辭の前

以上の提案には、議論をいくつか補ふ必要がある。大きな問題として、なぜ表層の音節を導出する過程で表層と異なる音節構造を假定する必要があるのか、しかも本稿の提案では最終の實現形に反映されることのない音節境界が基底に假定される場合があるが、それがどのように正當化可能かといふ問題がある。また媒介母音系接尾辭のうち、先の形態分析が單純に適用できないものもあるし、表 2 に含まれてゐない接尾辭は多い。このやうな問題について、音節末音の導出過程 (4 節)、變則用言の振る舞ひ (5 節)、その他 (6 節) の三つの視點に分けて論じる。

## 4 音節末音の導出過程: 子音音素の中和と子音連続の回避

本稿は朝鮮語の媒介母音を音節末子音連続の回避の方策として捉へるものである。朝鮮語では音節末子音連続の回避は子音削除によるものが知られてゐる。本節では第一にこの子音削除を含む音節末音の一般的な導出過程を記述し、それと母音挿入の規則が衝突しないことを示す。第二に、これと關聯し、表層の音節を導出する過程で表層と異なる音節構造を假定せざるを得ないケースが媒介母音以外に存在することを示す。二つの現象は媒介母音の挿入説にとつて有利な事實である。

朝鮮語では音節末に立ちうる子音音素は七つのみ (表 4) で、音節初頭に現はれる子音音素 (表 3) に比べ非常に少ない。

形態素末の子音は多くの場合、音節構造を指定されてゐないやうである。次の例を見よう。

- (38) a. .teip. 「家」  
b. .tei.pum. 「家は」

	兩脣	齒莖	齒莖硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	聲門
閉鎖音	/p/ [p~b] /p <sup>h</sup> / [p <sup>h</sup> ] /ʔp/ [ʔp]	/t/ [t~d] /t <sup>h</sup> / [t <sup>h</sup> ] /ʔt/ [ʔt]			/k/ [k~g] /k <sup>h</sup> / [k <sup>h</sup> ] /ʔk/ [ʔk]	
鼻音	/m/ [m]	/n/ [n]			/ŋ/ [ŋ]*	
摩擦音		/s/ [s~ç] /ʔs/ [ʔs~ʔç]				/h/ [h~fi]
破擦音			/tç/ [tç~dʒ] /tç <sup>h</sup> / [tç <sup>h</sup> ] /ʔtç/ [ʔtç]			
流音		/l/ [r~l]				
接近音	/w/			/j/		

表3 音節初頭子音

	兩脣	齒莖	齒莖硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	聲門
阻害音	/p/ [p <sup>ʔ</sup> ~p]	/t/ [t <sup>ʔ</sup> ~s]			/k/ [k <sup>ʔ</sup> ~k]	
鼻音	/m/ [m]	/n/ [n]			/ŋ/ [ŋ]	
流音		/l/ [l]				

表4 音節末子音

(38)に見られる p~p のやうに、多くの形態素末の子音が、環境によつて音節の末音としても初頭音としても實現する。同様の例を集めると、形態素末音が末音として實現する場合と初頭音として實現する場合で音素交替を起こすものが少なからず存在する。次に二つの例を擧げる。

(39) a. .ot. 「服」

b. .o.sum. 「服は」

(40) a. .<sup>ʔ</sup>kuut. 「終はり」

b. .<sup>ʔ</sup>kuu.t<sup>h</sup>um. 「終はりは」

一般に、これらは音節末音として實現不可能な子音を形態素末にもつものと考え、次のやうな基底形をたてて解釋されてをり、本稿もそれに従ふ(41b, c)。

- (41) a. .tɕip.~.tɕi.p //tɕip// 「家」  
 b. .ot.~.o.s //os// 「服」  
 c. .<sup>?</sup>kuut.~.<sup>?</sup>kuu.t<sup>h</sup> //<sup>?</sup>kuut<sup>h</sup>// 「終はり」

朝鮮語には基底形の音節末に上記の音節末子音音素目録にない末音を假定すべき語彙があるといふことである。このやうにしてたてられる形態素末の子音 (16 個) を (42) にまとめる。

- (42) p, p<sup>h</sup>, t, t<sup>h</sup>, k, k<sup>h</sup>, <sup>?</sup>k, m, n, ŋ s, <sup>?</sup>s, <sup>h</sup>, tɕ, tɕ<sup>h</sup>, l

//os// 「服」のやうな語が單獨で發話される場合、s は音節末音として實現不可能なので、中和規則により音節末音として實現可能な子音に變化させられるわけである (43)。

- (43) //os// → .os. → .ot. 「服」

次の素性の中和が起こると言へる。

- (44) a. spread glottis (sg)  
 b. constricted glottis (cg)  
 c. delayed release (dr)  
 d. continuant (cont)

以上の分析の考へ方に基づいて基底形をたててゆくと、基底形では形態素末に子音連続を含むものも存在する。

- (45) a. .kap. 「値段」  
 b. .kap.<sup>?</sup>sum. 「値段は」  
 c. //kap<sup>?</sup>s//

- (46) a. .tak. 「鶏」  
 b. .tal.kum. 「鶏は」  
 c. //talk//

基底の形態素末子音連続のうち一つは、音節末音として實現するときに削除される。(45a) と (46a) の導出過程を (47a, b) に示す。

- (47) a. //kap<sup>?</sup>s// → .kap<sup>?</sup>s. → .kap. 「値段」  
 b. //talk// → .talk. → .tak. 「鶏」

すると、朝鮮語は不可能な子音連続を回避するための方策として、子音削除を使ふことがあるといふことになる。一方、媒介母音の挿入説は、不可能な子音連続を避けるために母音挿入が起こるといふ解釈である。そのため、なぜ二つの方策が子音連続回避のために使はれてゐるのか、またどのやうな場合に子音削除が起こり、どのやうな場合に母音挿入が起こるのか、説明しなければならない。

まづ、基底の形態素末子音連続としてたてられうるものを全て (11 通り) 挙げる。

- (48) a. lp, lk, lp<sup>h</sup>, lt<sup>h</sup>, lm  
b. ntɕ  
c. p<sup>ʰ</sup>s, k<sup>ʰ</sup>s, l<sup>ʰ</sup>s  
d. l<sup>h</sup>, n<sup>h</sup>

(48) の形態素末子音連続を見ると、いくつかの特徴がある。まづ第一に形態素末に假定される子音連続は必ず二つからなり、三つ以上の連続はない。先に述べたやうに、朝鮮語の音節構造が (C)(G)V(C) である。そのため表層の子音連続は音節境界を挟んで二つの子音が並ぶ形しかない。形態素末に假定される子音連続が必ず二つの要素からなるのはこのことと關聯する\*16。

つぎに、<sup>h</sup> を第二要素とするものを除き、全て、音節をまたぐ子音連続として可能なものである。

最後に、子音連続のならば 1 が第一要素のもの と ?s が第二要素のものが主要なパターンになつてをり、ソノリティが大 → 小の順であるか、第二要素が ?s, <sup>h</sup> であるものに限られる。上のリストに示した子音連続は全て、逆順にした場合、形態素末子音連続としてありえない音素列となる。

ところで、1 を第一要素とする子音連続が基底に存在するといふこと自體が、媒介母音の挿入説にとって有利な事實である。媒介母音は用言 1 語幹の後では挿入されない。どちらの事實もある段階まで 1 を第一要素とする子音連続が許されてゐるといふことを示してゐる。母音挿入規則の適用段階では、1 始まりの 1 連続は母音挿入の対象とならない。

さて、形態素末に假定される子音連続と、媒介母音が起こる子音連続とで、同一の子音連続はない。用言語幹末に指定される單子音は (42) から ŋ, k<sup>h</sup> の二つを除いた 14 個であり\*17、所謂用言子音語幹は 1 語幹を除くものなのでその末音として現はれるものは (49a) の

\*16 形態的に複雑な形式ではさらに多くの基底の子音連続が発生する可能性がある。

\*17 用言語幹末に現はれる子音の種類は、分析によつて異なりうる。例へば Martin (1954: 28) は p 變則用言の語幹末音を w と考へる。また 卍주채 (2008: 98) は s 變則用言の説明のために語幹末の ? を採用し、用言語幹末の單子音を 15 個挙げてゐる。どちらも抽象度の高い假定である。

13 個である。また用言語幹末に措定される子音連続の組み合わせは (48) から  $k^?s$ ,  $l^?s$  を除いた 9 個である (49b)。

- (49) a.  $p, p^h, t, t^h, k, ^?k, m, n, s, ^?s, ^h, tɕ, tɕ^h$   
 b.  $lp, lp^h, lt^h, lm, lk, ntɕ, p^?s, n^h, l^h$

これらの後に、媒介母音系の接尾辭が来る場合、 $n, s, l, m, p$  のやうな音節末音が追加されることになる。それによる組み合わせの中に、形態素末子音連続と同一のものはない。もし音韻条件がしばれば、音節末音規則の一環としての母音挿入を考へられるかもしれない。つまり a)  $l$  を第一要素とする子音連続と、b)  $s$  や  $^h$  を第二要素とする子音連続及び c)  $ntɕ$  の三つのパタン以外の子音連続の間には、音節末音規則の適用前に、母音挿入が行はれるといふ規則である。しかし、いくつかの理由で、用言語幹と後續の接尾辭の音節構造から、つぎのやうな規則を立てるのが良ささうである。

- (50)  $u$ -insertion (媒介母音)  $\emptyset \rightarrow u / [+cons, -lat]]_{\text{VERB STEM}} \_\_\_\_\_\_ [_{\text{SUFFIX C}}$

上より純粹に音韻的な規則を立てない理由の一つは、上記の環境を一つの類としてまとめるのが困難であるといふことである。もう一つは、用言子音語幹 ( $[+cons, -lat]]_{\text{VERB STEM}}$ ) といふ環境に言及すべき規則が他にもあり、音韻規則の在り方として (50) で充分と考へられるからである。用言子音語幹に言及する規則は、つぎのやうな現象を説明するために必要になる。

- (51) a.  $.po-tɕi$ . 「見るだろ」  $//po+tɕi//$   
 b.  $.al-tɕi$ . 「知つてるだろ」  $//al+tɕi//$   
 c.  $.an-^?tɕi$ . 「抱くだろ」  $//an+tɕi//$

(51c) のやうに用言子音語幹の後續子音は濃音 (+cg: Constricted Glottis) に變化する。しかし、用言の語形變化以外では、同様の音素列でも濃音化を経ない (52)。

- (52)  $.tap.an.tɕi$ . 「答案用紙」

そこで、(51c) は次の規則により説明される。

- (53) 濃音化 (用言)  $[-son, -cg, -sg] \rightarrow [+cg] / [+cons, -lat]]_{\text{VERB STEM}} [_{\text{SUFFIX}} \_\_\_\_\_\_$

さて、基底の子音連続は音節末音として實現する際、音節末音規則の一環として子音連続の單純化が起こる。子音連続の單純化において、それぞれの子音連続はつぎのやうに括

弧内の子音を失ふ。

- (54) a. (l)p, (l)k, (l)p<sup>h</sup>, l(t<sup>h</sup>), (l)m  
b. n(tɛ)  
c. p(<sup>?</sup>s), k(<sup>?</sup>s), l(<sup>?</sup>s)  
d. l(<sup>h</sup>), n(<sup>h</sup>)

以上は、調音位置に違ひがあれば [-cor] の分節音が、ソノリティに差があればソノリティのより大きい分節音が一つ選ばれて実現するといふパターンを示してゐる。

ただし lp の子音連続単純化は語彙により l が削除されるものと (55a)、p が削除されるものと (55c) がある。

- (55) a. .pap.<sup>?</sup>tci. 「踏むだろ」 //palp-tci//  
b. .pal.pa. 「踏んで」 //palp-a//  
c. .<sup>?</sup>tcal.<sup>?</sup>tci. 「短いだろ」 //<sup>?</sup>tcalp-tci//  
d. .<sup>?</sup>tcal.pa. 「短いだろ」 //<sup>?</sup>tcalp-a//

palp- 「踏む」一例のみが例外的に l 削除を受けるといふ説明がされることもあるが、それでは一貫した子音連続単純化の規則がたてられない。この問題について §6.2 で扱ふ。

本節で見てきた子音の中和、および子音連続の単純化規則は、さまざまな音(連続)を音節末音として実現可能な子音に変化させる規則である。ところが、音節末音規則を適用された子音が音節初頭音として実現する場合がある。つぎの (56c) や (57c) のやうに後続要素が母音で始まる複合語の場合や、文節境界をまたぐ再音節化が起こる場合 (58) である。

- (56) a. .jΛp. 「横」 //jΛp<sup>h</sup>//  
b. .jΛ.p<sup>h</sup>e. 「横に」 //jΛp<sup>h</sup>-e//  
c. .jΛ.pΛl.kul. 「横顔」 //jΛp<sup>h</sup>#Λkul//
- (57) a. .nΛk. 「魂」 //nΛk<sup>?</sup>s//  
b. .nΛk.<sup>?</sup>si. 「魂が<sup>s</sup>」 //nΛk<sup>?</sup>s-i//  
c. .nΛ.kΛp.<sup>?</sup>si. 「ぼんやりと(魂無しに)」 //nΛk<sup>?</sup>s#Λp<sup>?</sup>si//
- (58) .o.tan.sa. 「服買はないの?」 //os#an#sa// (服#[否定]#買ふ)

このことが示してゐるのは、自立語として用ゐられうる形式の前にはある段階で表層に反映されない音節境界が設定され、それに従つた音節末音規則が適用される、といふことで

ある。そして再音節化により表層では別の音節構造が現はれる。

本稿の媒介母音解釈では、表層に現れない音節構造を假定せざるを得ない。しかし、朝鮮語では、媒介母音以外にも、形態的な事実に基づき表層と異なる音節構造をある段階で考へざるを得ないのである。つぎに規則の適用順を示す。

	jAp <sup>h</sup>	jAp <sup>h</sup> -e	jAp <sup>h</sup> #Alkul
	「横」	「横に」	「横顔」
音節末音規則	.jAp.	—	.jAp#Al.kul.
再音節化	—	.jA.p <sup>h</sup> e.	.jA.pAl.kul.
他の規則	省略	省略	省略
	[.jAp̚]	[.jA.p <sup>h</sup> e.]	[.jA.bAl.gul.]

表5 挿入母音と再音節化

なほ、音節末音規則が適用された子音が表層で音節初頭音として現はれる現象は最適性理論の枠組みでは不透明性の問題となる。そしてその解決は、やはり、最適性理論にある種の段階的評価を持ち込むことによつてしかできないものと思はれる (Han 2011)。

再音節化の音節構造に基づいて適用されることが知られてゐる規則として、ほかにも口蓋音化がある。

本節をまとめると、次の通りである。

- (59) a. 形態素末に見られる子音連続は削除により回避され、用言語幹と接尾辭の結び付きに生じる子音連続は挿入母音により回避されるが、兩者の子音連続は音韻的に異なる組み合わせである。
- b. l 始まりの子音連続は規則適用のある段階まで許されてゐる。
- c. 音節末音規則のあとに再音節化が適用されるケースがあることからみて、朝鮮語では一般的に表層とは異なる音節構造をもつある段階で音節構造に言及する規則が適用されることがあるのはたしかである。

## 5 ㅍ と「變則」用言

前節では過程で、明らかに表層とは異なる音節を経た処理が關はる例を見た。本節では基底の音節構造が必要になる媒介母音以外の現象であり、かつ ㅍ 挿入が關はる例があることを示す。

従来語幹末に **u** をもつとされてみた用言は全てなんらかの變則用言である\*18。本節では **u** 變則、**l** 變則、**lu** 變則と呼ばれる變則用言について順に見てゆく。

## 5.1 **u** 變則用言

3 節で導入したやうに、朝鮮語にはつぎの三種の文法接尾辭がある。

- (60) a. 非媒介母音系 (小學館の 1,2 類)
- b. 媒介母音 (**u**) 出沒系 (小學館の 3,4 類)
- c. a/ʌ 母音交替系 (小學館の 5 類)

母音語幹 **po-**「見る」と子音語幹 **pat-**「もらふ」に非媒介母音系の **-tci**「(する) だろ」媒介母音系の **-mjʌn**「(す) れば」a/ʌ 母音交替系の **-a**「(し) て (連用)」の三種の文法接尾辭が後續した形式をそれぞれ (61) と (62) に挙げる。

- (61) a. **po-tci**「見るだろ」
- b. **po-mjʌn**「見れば」
- c. **po-a**「見て (連用)」
  
- (62) a. **pat-<sup>?</sup>tci**「もらふだろ」
- b. **pat-u-mjʌn**「もらへば」
- c. **pat-a**「もらつて (連用)」

以上の場合、(62b) のやうに子音語幹に媒介母音系接尾辭が後續した場合にのみ **u** 挿入が起こる。

ところが、「**u** 變則用言」あるいは「**u** 語幹用言」と呼ばれる用言の語形變化は以上とは様相を異にする。以下の例を見よう。

- (63) a. **na<sup>?</sup>pu<sup>?</sup>tci**「悪いだろ」
- b. **na<sup>?</sup>pu<sup>?</sup>umjʌn**「悪ければ」
- c. **na<sup>?</sup>pa**「悪くて」

以上のやうに、このグループの用言は語幹と接尾辭の繼ぎ目の部分に **u** が出沒するが、媒介母音系の接尾辭が後續する場合 (63a) も、非媒介母音系の接尾辭が後續する場合 (63b)

---

\*18 「全てなんらかの變則用言である」といふ表現自體が奇妙な表現ではある。そのやうな理由で **u** 變則を單に **u** 語幹と呼ぶものも多い。



も、*w* があり、母音交替系の接尾辭が後續する場合 (63c) に *w* が現れない。この *w* は語幹に所屬するものとする通常見られてゐる。假にさうだとすると、語幹に變異 *na<sup>2</sup>puu~na<sup>2</sup>p-*「悪い」があることになる。「悪い」の語幹は *na<sup>2</sup>puu-*が基底形である可能性と *na<sup>2</sup>p-*が基底形である可能性といふ、二つの可能性があるが、通常論據なしに *na<sup>2</sup>puu-*基底説、つまり *w* 變則用言の *w* を語幹末音と見る説が取られてゐる。そこで、(63a, b) に現はれる *w* は媒介母音と呼ばれることはない。

*w* 變則の *w* の語幹末音説が一般的であるのは、媒介母音の *w* 削除説が大勢を占めることと関係があるかもしれない。媒介母音の「削除説」を取るものは *w* が削除される媒介母音以外の例とみて、「削除説」を支へる證據としてしばしば用ゐてをり、朝鮮語の用言語幹と接尾辭の繼ぎ目に一貫して *w* 削除がはたらくと言へるからである。また、朝鮮語の用言の citation form は非媒介母音系の接尾辭-ta によつて形成される。上記の「悪い」の citation form は *na<sup>2</sup>puta* である。つまり、このグループの用言は citation form において *w* をもつ。このやうなことが、*w* を語幹末音である印象を一層強めたのであらう。ただし、媒介母音の挿入説を取る者の中にも *w* 變則の *w* 挿入説を主張するものは見当たらない。

しかし、語幹の變異 *na<sup>2</sup>puu~na<sup>2</sup>p-*のうちどちらを基本の形式と見ることも理屈としては可能である。しかも、*w* のない形式を基本と見る方がより良い分析を提出できる。ただし、他の子音語幹用言とは語形變化の仕方が異なるため、なんらかの假定が必要である。實は、基底の音節境界を指定しさえすれば良い。普通の子音語幹との音節に關する振る舞ひの違ひをつぎに示す。

通常の子音語幹は非媒介母音系の接尾辭が後續する際、語幹末音が音節末音として實現し (64a)、媒介母音系の接尾辭や母音交替系の接尾辭が後續する際には語幹末音が次の音節の初頭音として實現する (64b)。

- (64) a. *pat.<sup>2</sup>tci* 「もらふだろ」  
 b. *pa.tuu.mjʌn* 「もらへば」  
 c. *pa.ta* 「もらつて(連用)」

そこで、通常の子音語幹用言の語幹末音は基底の音節境界をもたず、音節化の音韻過程のみが表層の音節に關與すると考へても良い。

ところが、次のやうに、*w* 變則の語形變化においては語幹の最後の子音は必ず音節初頭音として實現する。

- (65) a. *na.<sup>2</sup>puu.tci* 「悪いだろ」  
 b. *na.<sup>2</sup>puu.mjʌn* 「悪ければ」

c. na.<sup>?</sup>pa 「悪くて」

音節境界の指定された na.<sup>?</sup>p-が語幹の基底形と考へれば、本稿の立場からは、w 挿入が生じる環境を規則の条件に加へて w 變則の語形變化を説明することができる。勿論、規則に条件を加へる必要があるので、その分仕組が若干複雑になるとも言へる。しかし、w 變則が要する規則は次のやうに單純で、形態的な情報を指定する必要がない\*19。

(66) w-insertion (w 變則)  $\emptyset \rightarrow w / .C \_\_\_ (C).$

一方、削除説の立場に立つても、上の (65b) と (65c) で w 削除が起こることになる。詳しくは次の (67b) と (67c) を参照されたい。媒介母音に對しては先行する環境によつて w が削除される規則 (67b)、w 變則の語形においては後續する環境によつて w が削除される規則を立てることになる (67c)。後者に對して新たな w 削除の環境を規則の条件に加へなければならぬ。

- (67) a. na.<sup>?</sup>puw.tɕi ← na.<sup>?</sup>pu + tɕi  
 b. na.<sup>?</sup>puw.mjʌn ← na.<sup>?</sup>pu + wmjʌn  
 c. na.<sup>?</sup>pa ← na.<sup>?</sup>pu + a

ここまでの記述においては、w 變則の語形變化における w 削除説と w 挿入説に優劣をつけがたいかもしれない。基底の音節境界を想定する手間だけ挿入説に不利ともいへる。しかし、必ず初頭音で實現される音の前に基底の音節境界があるといふ挿入説の假定は不自然な假定ではないと思はれる。また、つぎに述べる母音調和の現象の説明、lʌ 變則の解釋への應用や luw 變則との基底形の區別など變則用言に関する問題、そして話し言葉における母音調和の崩壊現象の説明については明らかに挿入説に分がある\*20。次に母音調和の現象をみよう。

現代朝鮮語の母音調和は、生産的な現象としては用言語幹に母音交替系の接尾辭が後續する際にのみ見られる。用言語幹の最後の母音が a, o(陽母音)のいずれかである場合に後續する接尾辭のはじめの母音が a で現はれ、a, o 以外の母音(陰母音)が用言語幹の最終母音であるとき後續する接尾辭のはじめの母音が ʌ で現はれる。連用形の接尾辭-ʌ/-a で例示する。

\*19 形態情報を盛り込まないこの規則は強力である。外來語に見られる母音挿入もこの規則に従ふものと言へるのではないか。

\*20 w 變則の一部の語幹末音は歴史的に接尾辭に由來してをり、基底の音節境界はある程度の形態的な根據をもつてもゐると言へる。

- (68) a. po-a 「見て(連用)」  
 b. tu- $\Lambda$  「置いて(連用)」
- (69) a. pat-a 「もらつて(連用)」  
 b. m $\Lambda$ k- $\Lambda$  「食べて(連用)」

(68) は母音語幹、(69) は子音語幹の例である。

$w$  變則用言の語幹末音が  $w$  であるならば、 $w$  は陰母音であるから、 $\Lambda$  の後續が豫測される。しかしこの豫測はあたらない。次に  $w$  變則用言の連用形を提示する。

- (70) a. na<sup>?</sup>p-a 「悪くて(連用)」  
 b. s $w$ lp<sup>h</sup>- $\Lambda$  「悲しくて(連用)」

上に見られる通り、接尾辭のはじめの母音が a か  $\Lambda$  かは語幹の下線部の母音の種類によつて決まる。 $w$  變則用言を變則扱ひしなければならない理由の一つはこのやうな現象のためである。母音削除説に立つと、1.) 母音が削除された後に接尾辭のはじめの母音の音色が決まると解釋する、あるいは 2.) 母音調和のシステムにおいて用言語幹末の  $w$  を無視する規則、つまり母音をひとつ飛び越した調和を起こし、その後  $w$  を削除するなどの措置が必要になる\*21。2. はかなり複雑な規則である。しかし、1. の想定によると、 $w$  削除は相當に早い段階で起こることになる。

實は、媒介母音、及び  $w$  變則用言に關する  $w$  削除を考へる場合の短所として、より一般的に次のことがいへる。朝鮮語には山ほど音韻規則があるにも拘らず、媒介母音や  $w$  變則の  $w$  が基底に存在する假定を取ると、この  $w$  が被る規則は  $w$  削除だけである。基底の  $w$  に關するほかの規則はない。逆に  $w$  削除の規則の適用後の音形に對しては多くの規則が關する。このやうな  $w$  は初めからないものと思へるのが自然ではなからうか。なほ、この點は、媒介母音については姜昶錫 (1982: 28) がすでに指摘してゐる。

なほ、 $w$  變則用言のうち、.mo.w- $\sim$ .mo.- 「集める」のやうな語幹交替が起こるものは、以上の解釋において問題となりうる。語幹末に子音をもたないからである。しかし、本稿の  $w$  變則用言の解釋は、この一例を除き全て規則による説明ができる。この動詞の扱ひの別の可能性について §6.4 節で述べる。

\*21  $w$  變則用言の母音調和の扱ひについて多くの論者は曖昧である。최 叫 (1961: 337) は次のやうな過程を示してをり、母音削除の後に母音調和を適用する解釋をするものと考へられる。

i. <sup>?</sup>tal $w$  $\Lambda$   $\rightarrow$  <sup>?</sup>tal $\Lambda$   $\rightarrow$  <sup>?</sup>tala

最後に、「**tu** 變則」の振る舞ひを示す用言には語幹が子音一つからなるものがあり、これらに母音交替系の接尾辭がつくと、**a**ではなく **Λ**が出る。

- (71) a. **k<sup>h</sup>-tu-tçi** 「大きいだろ」  
b. **k<sup>h</sup>-Λ** 「大きく (連用)」

このことは次のやうに説明できる。母音調和の現象においては陽母音の方が種類も少なく有標である。母音交替系の接尾辭も陰母音に後續する **Λ** に始まる音形がデフォルトになつてゐると考へられる。

## 5.2 **lΛ** 變則用言

つぎは **lΛ** 變則と呼ばれる用言の例である。

- (72) a. **iltu-tçi** 「至るだろ」  
b. **iltu-mjΛn** 「至れば」  
c. **iltu<sub>l</sub>Λ** 「至つて (連用)」

(72c) の下線部に見られるやうに、この **lΛ** 變則用言語幹に母音交替系接尾辭が後續する際に、**l** が現れる。これは傳統的には「添加」されると解釋されてゐる。しかし、可能性はほかにもありうる。

- (73) a. **iltu-l-Λ** (**l** 添加)  
b. **iltu-lΛ** (**l** は接尾辭の一部)  
c. **iltu<sub>l</sub>-Λ** (**l** は語幹の一部)

管見の限り、**lΛ** 變則の **l** を語幹の一部と解釋する共時分析は見当たらない。남기심・고영근 (1993: 147) は共時的な立場から、이동석 (2005: 53-57) は通時的な立場から、**lΛ** 變則の **l** を語幹の一部と看做す可能性に言及してゐる。しかし、ともに **l** を語幹の一部と看做すと特定の語尾の前で **l** が脱落する現象が説明できなくなることを理由にその解釋を否定してゐる。このやうに **l** を語幹の一部としない説が有力だが、**l** 添加説や **l** が接尾辭の一部と考へる説では、この「變則用言」を自然な音變化のみで捉へることはできない。

「至る」を意味する語幹が **i.lu-~i.lu.l** の交替を起こすのだから、基底形で語幹末 **l** の存在を認めるのは自然な假定である。남기심・고영근 (1993) も 이동석 (2005) も使つてゐる論理は、**iltu<sub>l</sub>**-形が、**l** 語幹の **i.lu<sub>l</sub>**-だと考へる場合、他の **l** 語幹に起こらない **l** 脱落が起こることになるので説明がより複雑になるといふ論理である。しかし、**iltu<sub>l</sub>**-形が、**l** 語幹の

i.lu:l-である可能性の他に、「u 変則」語幹 i.lu:l-の音節構造をもつ可能性を考慮に入れてみない。実際に i.lu:l-の音節構造で実現されるのだから i.lu:l-がこの語幹の基底だとする假定が可能であり自然である。そして、語幹交替の動機はある段階での haplology と言へる。

- (74) a. ilu:l-+tci → i.lu.lu:tci (haplology) → i.lu:tci  
 b. ilu:l-+m.jʌn → i.lu.lu:m.jʌn → i.lu.lu:m.jʌn (haplology) → i.lu:m.jʌn  
 c. ilu:l-+ʌ → i.lu:l-ʌ

語幹末に .lu:l-を持つ用言は lʌ 変則用言以外にないので規則の条件において語彙的な変則性に言及する必要がない。lʌ 変則の振る舞ひは次の haplology 規則で説明される。

- (75) morphological haplology (lʌ 変則) lu:l. → ∅ / lu:l.\_\_\_\_]VERB STEM

語形変化に見られる haplology は多くの言語で報告されてゐる。英語の boys' 「少年たちの」などは、二重の-s が現はれず、その例にあたる。Stemberger (1981) は形態的な haplology においては消える音形が必ず接辭・接語であるといつてゐる。これに對し、de Lacy (1999) は「消える音形が常に接辭である」といふ主張は強すぎるとしてゐる。朝鮮語の lʌ 変則の上記の解釋が成り立つならこれは語幹に生じる haplology であり、Stemberger の説の反例になる。また Stemberger では haplology の削除説を廢したが、その方法は lu 削除では應用しがたい。

lʌ 変則用言が .lu:l-を語幹末にもつといふことは、語幹最終母音が u であるといふことである。そのことは母音調和の現象にも反映してゐる。lʌ 変則用言の連用形の最終音節は lʌ であり、la ではない (76c)。

- (76) a. noluu-tci 「黄色いだろ」  
 b. noluu-mjʌn 「黄色ければ」  
 c. noluu-l-ʌ 「黄色くて(連用)」 (\*noluu-l-a)

u 変則の u 削除説に立つと、以上の事實の説明は語彙的な変則性の指定に大きく依存せざるを得ない。先述の通り、u 変則では「語幹末」の u を無視する母音調和が起こる (77c)。

- (77) a. <sup>?</sup>taluu-tci 「從ふだろ」  
 b. <sup>?</sup>taluu-mjʌn 「從へば」  
 c. <sup>?</sup>tal-a 「從つて(連用)」 (\*<sup>?</sup>tal-ʌ<sup>\*22</sup>)

<sup>\*22</sup> <sup>?</sup>tal-ʌ 「從つて(連用)」は標準語形ではないが、話し言葉には現はれる。その現象については 5.3 で扱ふ。ここでは標準語形として許容されないことを示しておく。

そこで、 $w$  削除説かつ  $l$  添加説を取る場合、 $l\Delta$  変則でなぜ  $la$  が出ないかも問題になりうる。 $w$  削除説かつ  $l$  添加説による解決は、 $w$  変則用言のみが  $w$  削除を受け、 $l\Delta$  変則用言のみが  $l$  添加を受ける、そして母音調和規則がそれらの後に適用される、といふことにならう。一方、 $w$  変則用言の  $w$  添加説かつ  $l\Delta$  変則用言の  $luw$  削除説を取れば全てが例外のない自然な規則で説明できる。

更に、 $l\Delta$  変則用言の語幹末  $l$  の存在は古語においても実証されてゐる語彙がある。『李朝語辭典』の次の項目は、現代語の  $l\Delta$  変則用言にあたる。

- (78) a.  $p^hulul-$  「青い」  
 b.  $nilul-$  「至る」

また、Martin (1992: 242) は  $ilul.l$  の方言形 (Taycen) として、 $ilulul-$  を挙げてゐる。また、一般に誤用とされるが人口に膾炙してゐる表現に  $p^hulululm\ hanul$  「青い空」がある\*23。

以上から、 $l\Delta$  変則用言は基底で  $lu.l$  を語幹末にもつことが最も自然な假定であり、また本稿での  $w$  変則の解釋とも整合性があることになる。

### 5.3 $luw$ 変則用言

$luw$  変則と呼ばれる変則用言の語形變化の例をつぎに示す。

- (79) a.  $.mo.luw.tci$  「知らないだろ」  
 b.  $.mo.luw.mj\Delta n$  「知らなければ」  
 c.  $.mol.l-a$  「知らなくて」
- (80) a.  $.pu.luw.tci$  「呼ぶだろ」  
 b.  $.pu.luw.mj\Delta n$  「呼べば」  
 c.  $.pul.l-\Delta$  「呼んで」

上の  $.mo.luw\sim mol.l$  や  $.pu.luw\sim pul.l$  のやうな交替を示す  $luw$  変則用言の語幹基底形の立て方の可能性は複数通りある。交替形のどちらかを基底の形式と見ることにならう\*24。 $w$  変則と同じく、上記では下線部の母音によつて母音調和が起こるため、 $w$  を語幹末母音と考へない方が自然である。にも拘らず、 $.luw$  が基本の形式と考へる見方がこれまで強かつた。

\*23 『금성 국어 대사전』にも「誤用」として例がある。

\*24 남기심・고영근 (1993: 144) は  $luw$  変則の語幹基底形の立て方に  $...luw$  と  $...ll$  の二通りがありうることを指摘してゐる。そして  $\text{뉘}$   $\text{뉘}$  が後者の解釋をしてゐると述べてゐる。しかし  $\text{뉘}$   $\text{뉘}$  (1961: 345-348) の記述は明らかに前者に則るものである。

lu 變則用言が.lu-を語幹末にもつとすると、第一に問題になることは、u 變則や l<sub>Λ</sub> 變則語幹と、基底の形式のみでは區別できないといふことである。従来、以下の語彙は全て lu に終はる語幹末音をもつとされてゐる。そして、三つの異なる語形變化を起こすものとして、語彙的に變則性が指定されてゐるものとされてゐる。

- (81) a. <sup>?</sup>talu- 「従ふ」 (u 變則陽語幹)  
 b. t<sup>h</sup>ilu- 「支拂ふ」 (u 變則陰語幹)  
 c. nolū- 「黄色い」 (l<sub>Λ</sub> 變則陰語幹)  
 d. ilū- 「至る」 (l<sub>Λ</sub> 變則陰語幹)  
 e. molū- 「知らない」 (lu 變則陽語幹)  
 f. pulū- 「呼ぶ」 (lu 變則陰語幹)

上の例示から、先に言及したもう一つの問題も見える。(81a, b) や (81e, f) は語幹末の u を無視し、その前の母音によつて母音調和を起こすが、(81c, d) のやうに l<sub>Λ</sub> 變則用言は全て陰語幹の振る舞ひをする。上の全てが u といふ語幹末音をもつものとする、以上のことが基底の音形からは讀み取れず、それぞれの變則性として説明されることになる。

それに對し、本稿の解釋は u 變則用言、l<sub>Λ</sub> 變則用言について、語幹末の子音が音節初頭音指定されてゐる (82a, b, c, d)、といふものであつた。

- (82) a. <sup>?</sup>ta.l- 「従ふ」  
 b. t<sup>h</sup>i.l- 「支拂ふ」  
 c. nolū.l- 「黄色い」  
 d. ilū.l- 「至る」

lu 變則用言は (83) のやうに.l-を語幹末にもつものであると考へることができるとはなからうか。

- (83) a. mo.l- 「知らない」  
 b. pu.l- 「呼ぶ」

この假定は二つからなる。基底形語幹末に分節音 l もつといふこと、そしてその前に音節境界が指定されてゐると言ふことである。分節音レベルでは交替形のうち l.l-を、音節構造レベルでは交替形のうち.lu-を重視したものと言へる。このうち、後者の假定は強い主張としては提示できない。が、これまで論じてきた仕組と相性の良い一つの假説である。

といふのは、第一に、以下のやうに II 終りの *u* 變則用言もあるため、*lu* 變則用言の語幹末の音節境界が *l.l* ではありえない。

- (84) a. *tuɭlu-tɕi* 「寄るだろ」  
 b. *tuɭlu-mjʌn* 「寄れば」  
 c. *tuɭl-ʌ* 「寄つて」  
 d. ゆゑに *//tuɭl.l//* (二つ目の *l* は次の音節初頭に指定されてゐる)

姜昶錫 (1982: 57) は *lu* 變則の語幹末音基底形を *lluu-* と立てる可能性を指摘してゐる。この考へ方が本稿での語幹末 *l.l* に該当する。これによると上の (84) のやうな用言と *lu* 變則用言の違いを基底形に反映させられない。

第二に、つぎのやうにある段階で VII. は許容されてをり、異なる振る舞ひをする (85a で *lu* が発生しない) ため *lu* 變則用言が語幹末に VII. を持つともしがたい。

- (85) a. *//nol+l.ʌ//* → *noll.ʌ* → *nol.lʌ* 「遊びに」  
 b. *//nol+l<sup>ʔ</sup>.//* → *noll<sup>ʔ</sup>.* → *nol* 「遊ぶべき」

*lu* 變則用言の語幹末音を *.ll* と假定すれば以上の問題に舐觸しない\*25。

語幹末の *.luu-~l.l* の交替に対して、以下の規則を一つ假定することになる。

- (86) *l*-vocalization *l* → *u* / *l* \_\_\_\_\_ ]<sub>VERB STEM(C)</sub>.

また再音節化により *.ll* が *l.l* に變化する。

*l* が *u* に變はる規則は通言語的に見て不自然ではない\*26。また次の二點が指摘できる。1) 従来 *lu* 變則解釋では *u* が *l* に變はる規則を假定せざるをえず、不自然である。2) 朝鮮語の音節末 *l* は母音に近い性質を持つ\*27。二點目についてはつぎに見る。

朝鮮語の音節末 *l* が母音と共有する性質は次の通り。

\*25 *lu* 變則用言の語幹末音を *.ll* と假定することは、*r, l* 由來の外來語の振る舞ひの違いを考へればむしろ自然といへる可能性がある。固有語の用言語幹の種類としても *r, l* 二系を種類として假定できる利點がある。

i. *l* 語幹 *//al-//* [*al.-*] ~ [*a.r-*] 「知る」  
 ii. *lu* 變則 *//mo.l-//* [*mo.r-*] ~ [*mol.l-*] 「知らない」  
 iii. *t* 變則 *//tuɭ-//* [*tuɭ.-*] ~ [*tuɭ.r-*] 「聞く」  
 iv. *u* 變則 *l*-語幹 *//<sup>ʔ</sup>ta.r-//* [<sup>ʔ</sup>*ta.r-*] 「從ふ」

しかし、ここではこれ以上追究しないことにする。

\*26 [T]he change of [l] to back vocalic segment such as [o] in word-final (or syllabic-coda) position is a natural process found in many languages. (Kenstowicz 1994: 91)

\*27 Ladefoged and Maddieson (1996: 182) は通言語的な側面音の定義に舌と口腔上部との接觸を含めてゐない。



- (87) a. /l/は音節初頭では [ɾ] だが音節末では側面接近音 [l̪] で實現される。言ふまでもなく接近音は音聲的に母音に近い  
 b. 用言語幹末が母音あるいは音節末 l の場合媒介母音が出ない。つまり音韻システム上類をなしてゐる。

lu 變則用言語幹が分節音レベルで u を末音としてもたないといふ假定は母音調和の振る舞ひからも自然な假定である。

話し言葉においては母音調和がルーズになる現象がある。例へば、次は陽語幹に略待の -a/Λ がついた例であるが、話し言葉では母音調和を破つたデフォルト形式-Λ がむしろ好まれる。

- (88) a. pat-a ~ pat-Λ 「もらふ (略待)」  
 b. na<sup>?</sup>p-a ~ na<sup>?</sup>p-Λ 「悪い (略待)」 (u 變則)  
 c. tall-a ~ tall-Λ 「異なる (略待)」 (lu 變則)

上に示したやうに u 變則や lu 變則でも同様の振る舞ひが見られることに注意されたい。

ところで、이동석 (2005: 259) が指摘するやうに「語幹の母音が o である場合には語尾として a を選擇する傾向が未だに残つてゐる」。

- (89) a. po-a, \*po-Λ 「見る (略待)」  
 b. kop<sup>h</sup>-a, \*kop<sup>h</sup>-Λ 「(腹が) 減る (略待)」 (u 變則)  
 c. moll-a, \*moll-Λ 「知らない (略待)」 (lu 變則)

つまり、標準的な母音調和においても、話し言葉におけるルーズな母音調和においても、u 變則や lu 變則に現はれる u が語幹最終母音として扱はれることはない。

以上のやうな理由でここでは lu 變則用言に現はれる u を基底の語幹末音として見なかつた。

もう一つの見方として勿論、.lu が基底の語幹末音だと考へる方法がある。その場合でも、本稿の u 變則の解釋と lΛ 變則の解釋に基づけば、ほかに u を末音とするものがないため、従來說に比べて規則の立て方がずつと楽になる。すなはち従來說では語幹の變則性に言及する規則を立てる必要があるのに對し (90a)、ここではその必要がない (90b)。

- (90) a. /-doubling lu → ll / \_\_\_\_ ]LU-IR-VERB STEM+[INF SUFFIX  
 b. /-doubling lu → ll / \_\_\_\_ ]VERB STEM+[INF SUFFIX

## 6 關聯するその他の事柄

ここでは本稿の提案に關聯する事柄をさらに挙げ、これまでの議論を補ひたい。本節のいくつかの論點については解釋の可能性を示すものに過ぎない。

### 6.1 語形變化クラスのゆれ

標準語で l 語幹とされる語幹の中には u 變則との變則性のゆれを示すものがある。

- (91) a. .na.nu. 「飛ぶ (現在連體)」 //nal.nu.// (l 語幹)  
b. .na.lu.nu. 「飛ぶ (現在連體)」 //na.l.nu.// (u 變則)
- (92) a. .ka.tɕ<sup>h</sup>i.n. 「亂暴な (現在連體)」 //ka.tɕ<sup>h</sup>i.l.n.// (l 語幹)  
b. .ka.tɕ<sup>h</sup>i.l.n. 「亂暴な (現在連體)」 //ka.tɕ<sup>h</sup>i.l.n.// (u 變則)

本稿の解釋では上記の通り變則性の變異を基底の音節境界のゆれ (例へば nal~na.l-) で説明できる。一方、従來說ではつぎのやうな語幹のゆれを設定せざるを得ない。

- (93) a. nal- 「飛ぶ」 ~nalu- 「飛ぶ (u 變則)」  
b. ka.tɕ<sup>h</sup>il- 「亂暴な」 ~ka.tɕ<sup>h</sup>ilu- 「亂暴な (u 變則)」

上の語幹の搖れにおいては u 挿入を想定することにならう。しかし、なぜ u 挿入が起こるのか不明である。また、それ以上に深刻な問題も抱へてゐる。さまざまな變則用言に對し、從來通り語幹末の u を認める場合、語幹末に lu をもつ用言は壓倒的多数 lu 變則であり、u 變則や l 變則として活用するものは少ないといふ事實があるからである。

語幹の變異、nalu- を基底の分節音の變化と捉へると nalu- が通常の lu 變則ではなく u 變則として活用することの説明が難しい。語幹の音節構造のゆれと考へれば、そのやうな問題は起こらない。

lu 變則用言にもしばしば語幹形式に搖れが出る。

- (94) a. mo.lu.tɕi 「知らないだろ」 //mo.l.tɕi//  
b. mol.lu.tɕi 「知らないだろ」 //mol.l.tɕi//

本稿の提案に沿つて考へれば上記の搖れも語幹の音節構造の搖れとして解釋できる。しかし、従來說ではつぎの二つの語幹の分節音の搖れとして説明しなければならない。

- (95) a. molu- (lu 變則)

b. mollu-(u 變則)

## 6.2 形態分析・語源と音節境界

朝鮮語學において基底の音節の假定自體は新しいものではない。ただし、現代朝鮮語の分析においては基底に音節を想定せず音節化の規則のみをたてるのが優勢なやうだ\*28。

本稿の主たる提案は媒介母音系接尾辭のはじめの子音が音節末音として基底で指定されてゐるといふ假定であり、そこに認められる音節境界は cranberry 形態素境界である主張を行なつた。實は、Martin (1954: 44-45) および Martin (1992) の共時的な形態分析では、ほぼ同様の單位が形態素として扱はれてゐる。例へば以下のやうなものである (表記は本稿の方針に改めた)。

- (96) a. -(u)mjA 列挙 ← -(u)m+jA  
b. -(u)mjAn 條件 ← -(u)mjA+n  
c. -(u)ma 下稱約束 ← -(u)m+a  
d. -(u)mse 等稱約束 ← -(u)m+s+e  
e. -(u)ljA 意圖 ← -(u)l+jA

Martin のほかにも、通時的な研究においてはこれらがもともと有意義な形式であつたことに觸れてゐる。例へば疑問接尾辭の文法化の過程については고영진 (1995) が詳しい。

- (97) 文法化: {nuun, ul, tAn}+i+a → -nunja, -ulja, -tAnja

このやうな語源的單位があることは知られてゐながら共時分析としてこれらの單位を使ふ者は Martin 以外見かけられない。しかし、本稿で扱つた事實は、これらの語源單位が共時體系の中に生きてゐることを示してゐる。

ただし、尊敬の-(u)si-は、歴史的に見て末音的 s であつたとは言ひがたい。u を音形にもつ-usi-に遡ると言へる。しかし、共時的に末音的 s を形態單位として立てる理由は、媒介母音のほかにもある。尊敬の-(u)si-に由來する接尾辭の一部は、以下のやうに母音 i を持たないからである。

- (98) a. -(u)sosa 懇願  
b. .ha.se.jo 「なさいます」 //ha-s-ejo// (する-[尊敬]-[略待上稱])

\*28 研究史は신승용 (2007:102-103)、배주채 (2008: 35, 77-90)などを参照。

そこで、s が単獨で形態單位として再分析された可能性がある。だとすると、そのことは、以前の母音脱落規則が母音挿入規則に再分析されたことを意味する。以前の母音脱落規則が母音挿入規則に再分析されることは通言語的にしばしば見られる (Blevins 2004: 157-158) ためこれも不自然な假定ではない。

媒介母音系接尾辭の初頭音で形態/語源分析により音節末子音に辿りつかないものは少ないが、尊敬の-(w)si-以外に次のものがある。ともに、本節の最後で扱ふ。

- (99) a. -wio ~ -<sup>?</sup>so ~ -o 中稱  
 b. -wop- ~ -<sup>?</sup>saop- ~ -op- 美化

w の關する變則用言に關しても、基底の音節境界を考へることで説明できることを示した。實は、w 變則用言の單純語根を集めると、つぎのやうに子音一つからなる語幹があり、これらについては基底の音節を考へるまでもない。通常の音節化と母音挿入の規則に従ふもののできる。

- (100) k<sup>h</sup>-「大きい」、t<sup>h</sup>-「ひび割れる、芽が出る」、<sup>?</sup>s-「使ふ、苦い」、<sup>?</sup>k-「消す」、<sup>?</sup>t-「浮く」

上は現代語の單子音語幹である。濃音、激音ばかりであり、それ以外のものは見つからなかつた。(100)に擧げた語根を最終要素とする派生語、複合語は多い。例へば以下のやうなものだが、共時的に形態素と考へることに問題なく、形態的單位に基づいた音節指定、あるいはむしろ音節化が自然である。

- (101) a. him+<sup>?</sup>s-「頑張る」(力+使ふ)  
 b. tuul+<sup>?</sup>t-「うきうきする」(激+浮く)

この音節境界のうちいくつかは明らかに昔の形態的な境界の殘滓と考へられる。以下は全て금성 국어 대사전に形容詞派生接辭-pV<sup>\*29</sup>に由來するものとの語源記載がある<sup>\*30</sup>。

- (102) a. ko.p<sup>h</sup>- ← kolh-pɔ- 「空腹だ」  
 b. sul.p<sup>h</sup>- ← sulh-pui- 「悲しい」  
 c. ku.sul.p<sup>h</sup>- ← ku-sulh-pui- 「物悲しい」  
 d. a.p<sup>h</sup>- ← alh-pɔ- 「痛い」  
 e. ʌsʌl.p<sup>h</sup>- ← ʌl-sʌl-pui- 「がさつだ」

<sup>\*29</sup> 形容詞派生接辭-pV の形態素末の母音も假定する必要がない可能性がある。

<sup>\*30</sup> ただし、この語源記載は形態素に分けてその語源を示すものであり、派生された全體の形式が在證されてゐないものが混じつてゐるやうである。

- f. kanjal.p<sup>h</sup>- ← kənəl-pə- 「か弱い」
- g. ɛtal.p<sup>h</sup>- ← ɛ-təl-p- 「つらい」
- h. ki.<sup>?</sup>p- ← kisk-puu- 「嬉しい」
- i. ka.<sup>?</sup>p- ← kɔsk-pə- 「(息が) 苦しい」
- j. na.<sup>?</sup>p- ← nətɕ-pə- 「悪い」
- k. pa.<sup>?</sup>p- ← patɕ<sup>h</sup>-pə- 「忙しい」

形容詞派生接辭-pV は共時的には生産性を全く失つてをり、先行要素が現代語に残つていない場合や意味的な透明性が維持されてゐない場合も多い<sup>\*31</sup>。つまり、-p とその先行形式は共時的には cranberry 形態素としか言へない<sup>\*32</sup>。

下の例は辞典に語源の記載がないが、上記と同様<sup>?</sup>p や p<sup>h</sup> に終はる u 變則形容詞である。

- (103) a. je.<sup>?</sup>p- 「可愛い」
- b. ʌja.<sup>?</sup>p- 「美しい」
- c. he.p<sup>h</sup>- 「無駄な」
- d. kotal.p<sup>h</sup>- 「だるい」
- e. sʌkuɪl.p<sup>h</sup>- 「物悲しい」

(103) に示した形式は、通時的にも形態素分析ができない可能性がある<sup>\*33</sup>。しかし、以上に見たやうに<sup>?</sup>p や p<sup>h</sup> に終はる u 變則語幹は多く、また使用頻度の高いものが多い。おそらく、話者が音形の類似と形容詞的意味とによつて「u 變則」といふ同一の語形變化を維持させるにたる聯想關係をもつてゐるものと思はれる。そして、本稿の提案に従へば、それは<sup>?</sup>p や p<sup>h</sup> の前の音節境界として残つてゐるといふことになる。

なほ、u 變則用言語幹末に現はれる k<sup>h</sup>, <sup>?</sup>t, <sup>?</sup>p は正則用言語幹末には見られない子音である。

ところで、上のやうな u 變則形容詞では、最終の子音が濃音と激音のものしか見付からなかつた。そのことはつぎに紹介する現象と關係があるやうに思はれる (104)。

- (104) a. .pap.<sup>?</sup>tci. 「踏むだろ」 //palp-tci//

<sup>\*31</sup> 李基文 (2008: 162) は ko.p<sup>h</sup>- 「空腹」と kol<sup>h</sup>- 「痛む」、a.p<sup>h</sup>- 「痛い」と al<sup>h</sup>- 「病む」の派生關係が現在では意識されないとしてゐる。

<sup>\*32</sup> 二つの cranberry 形態素からなる複雑形式について朝鮮語の他の例は치다 (2010: 40-41) に、ドム語の例は Tida (2006) に詳しい。

<sup>\*33</sup> 이동석 (2005: 40) では文献には見付からないが ʌja.<sup>?</sup>p- 「美しい」の語根になつた動詞語幹 ʌjas-がある時期に存在しただらうといふ。形式が在證されるまで眞偽は分からないが、この發言は、本稿に示した聯想關係が母語話者にとってリアルなものであることを示してゐるかもしれない。

- b. .pal.pa. 「踏んで」 //palp-a//
- c. .<sup>?</sup>tcal.<sup>?</sup>tci. 「短いだろ」 //<sup>?</sup>tcalp-tci//
- d. .<sup>?</sup>tcal.pa. 「短いだろ」 //<sup>?</sup>tcalp-a//

(104) は (55) の再掲である。palp- 「踏む」の子音連続 lp の単純化は l 削除を受ける形で行はれるのに對し、形容詞語幹末の子音連続 lp の単純化は p 削除を受ける形で行はれる。この振る舞ひの違いは語彙的・形態的にしか説明できない。形容詞語幹末の lp の p が cranberry 形態素であるとする、そのことが子音連続単純化に反映してゐるのではないだろうか。具體的には語幹末に l.p-をもつてゐながらそのあとに u 挿入を起ささないのではないか。だから p 終はりの「u 變則」用言がないのではないか。

김홍석 (2008) によると、つぎの二例はそれぞれ語根 tam-, tcam- に意味上大きな役割を果たさない -ku- がついたものである。

- (105) a. tam.k- 「漬ける」
- b. tcam.k- 「閉ざす」

すると上の例も通時的には複雑な形態に由來し、音節境界のみを基底に残してゐる複雑形式といへる。

語幹末に子音をもたない u 變則用言である mo.-~mo.u- 「集める」も子音語幹 mot- に態を表す o がつけられたものに由來し\*<sup>34</sup>。語源的に形態境界をもつ。

複数音節からなる単純語根の「u 變則」にはつぎのものがある。

- (106) a. mu.n- 「崩す」\*<sup>35</sup>
- b. <sup>?</sup>ko.n- 「持ち上げる、評價する」 (~<sup>?</sup>konh-)
- c. t<sup>h</sup>i.l- 「拂ふ」
- d. <sup>?</sup>ta.l- 「従ふ」
- e. ul. l- 「仰ぐ」

(106a, b) は語幹末に n をもつものだが、たいへん使用頻度が低く、このような語彙をもたない、あるいは mun. <sup>?</sup>tuuli- のような複合語の中でのみその形式を知つてゐるだけの母語話者が多いものと思はれる。辭書に記載があるだけの語彙と見て良い。(106c, d, e) は語幹末

\*<sup>34</sup> この語幹は古形以外にも、方言形で語幹末の子音を確認できる。また標準語にも關聯形式 motu 「全て」、motum 「全ての」があり、これらの語根に t が認められる。

\*<sup>35</sup> mu.n- 「崩す」は李善英 (2007) によれば、中世語では複合語の構成成分としてしか使はれなかつた mu.l が、近代語で munhu- の形式の用言に置き替はり現代に至つてゐるもので、昔の形態境界と音節境界が直接の關係を結んでゐない。

に1をもつものであり、このうち(106e)は連用形 ulΔlΔ 以外で用みられることは少ない。

ここで扱った u 変則語幹に、それらからの派生語、複合語を加へればかなり網羅的な u 変則用言語幹のリストになる。つまり、通時的に形態境界を求められない u 変則用言語幹として問題となりうるのは(106)程度にとどまる。

### 6.3 下稱・等稱疑問接尾辭の文法化

本稿の提案に従へば、고영진(1995)に示された下稱・等稱疑問接尾辭の文法化の過程を、資料を加へて補強できる。고영진(1995)の分析は主に意味的な面での文法化を扱つてゐる。しかし、文法化は形式的な側面をも合はせて考慮すべきである。

具體的にはつぎのやうな現象を下稱・等稱疑問接尾辭の文法化の過程の最終局面に位置づけることができると考へる。

下稱疑問の標準的な接尾辭は、品詞によりつぎの変異を示す。

- (107) a. -.nuun.ja ([動存])  
b. -.n.ja ([形指])

動詞・存在詞の後續形(107a)は-.nn.ja から u 挿入を経たものである可能性がある。上の形式は例へばつぎのやうな例に現はれる。

- (108) a. .ka.nuu.nja. 「行くか」 //ka-.nn.ja//  
b. .mΔk.nuu.nja. 「食べるか」 //mΔk-.nn.ja//  
c. .k<sup>h</sup>uu.nja. 「大きいか」 //k<sup>h</sup>-.n.ja//  
d. .tɕa.kuu.nja. 「小さいか」 //tɕak-.n.ja//

ところが、話し言葉では、品詞に拘らず接尾辭-.nja による非標準的な下稱疑問形が使はれる。例へばつぎの通りである。

- (109) a. .ka.nja. 「行くか」 //ka-.nja//  
b. .mΔk.nja. 「食べるか」 //mΔk-.nja//  
c. .k<sup>h</sup>uu.nja. 「大きいか」 //k<sup>h</sup>-.nja//  
d. .tɕak.nja. 「小さいか」 //tɕak-.nja//

そこで、形式面でも次の縮約・收斂が起こつたものと思へることができる。

- (110)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{[動存]-nn-i-a} \\ \text{[形指]-n-i-a} \end{array} \right\} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{[動存]-.nn.ja} \\ \text{[形指]-n.ja} \end{array} \right\} \rightarrow \text{-.nja}$

#### 6.4 形態音素 z の可能性

中稱の-(u).o と美化の-(u).o(p)-は媒介母音との關聯で多くの問題を生じさせる。これらの接尾辭が用言子音語幹に後續すると u が生じる。

- (111) a. .ka.o. 「行つておくれ」 //ka-(u).o//  
b. .pa.tu.o. 「もらつておくれ」 //pat-(u).o//
- (112) a. .ka.o.ni. 「行きますので」 //ka-(u).o(p)-n.i//  
b. .pa.tu.o.ni. 「もらひますので」 //pat-(u).o(p)-n.i//

本稿では媒介母音を子音連續回避のための母音挿入と解釋したが、ここでは表面上、子音連續が關與しない。挿入母音説を保つたまま上記の現象に沿つた規則を立てるのは難しくない(113)が、挿入母音が生じる動機が不明である。

- (113)  $\emptyset \rightarrow u / [+cons, -lat]]_{\text{VERB STEM}} \_\_\_\_\_\_ [_{\text{VERB SUFFIX}} \cdot [-cons]$

これらに對して、§3.2の最後で觸れた-supnita等の扱ひと同様、短形が基底となつてゐない解釋もできる。しかし、別の解釋もありえるのである。

中稱の-(u).o と美化の-(u).o(p)-は1語幹の1脱落も引き起こす。

- (114) a. .sa.o. 「生きておくれ」 //sal-(u).o//  
b. .sa.o.ni. 「行きますので」 //sal-(u).o(p)-n.i//

1脱落の環境をすでに立てた規則に加へることは難しくない。

- (115) *l*-deletion  $l \rightarrow \emptyset / V \_\_\_\_\_\_ ]_{\text{VERB STEM}} (.)s, n \text{ or } V \_\_\_\_\_\_ ]_{\text{VERB STEM}} \cdot V$

しかし、.Vの前で1脱落が起こる理由が不明である。やはり別の解釋が必要である。そしてそのために一旦は抽象的な形態音素 z の設定が必要である。

形態音素 z は s 變則用言の振る舞ひを説明するために立てられることがある<sup>\*36</sup>。s 變則用言は語幹末の音形に t~ $\emptyset$ の交替を示す(116)。

- (116) a. .nat.tci. 「癒るだろ」 //naz-tci//  
b. .na.u.mjAn. 「癒れば」 //naz-m.jAn//

<sup>\*36</sup> 남기심・고영근(1993: 140)によると、이병건(1971: 79-81、筆者未見)のやうに s 變則用言の語幹末音を z と見る分析がある。



c. .na.a. 「癒つて (連用)」 //naz-a//

この t~∅ をともに一つの形態音素 z と看做すわけである。次に關聯する規則を示す。

- (117) a. z の變化  $z \rightarrow t / V \_\_\_ C$   
b. z 脱落  $z \rightarrow \emptyset / \_\_\_ V$

形態音素 z は中稱、美化の接尾辭の扱ひにも應用できる。中稱の接尾辭は (118) のやうに母音語幹・1 語幹後續形と子音語幹後續形が異なり、子音語幹後續形には自由變異がある。

- (118) a. 母音語幹・1 語幹後續形: -o  
b. 子音語幹後續形: -u<sub>o</sub> ~ -<sup>?</sup>so

美化の接尾辭もこれによく似てゐる。(119) のやうに母音語幹・1 語幹後續形と子音語幹後續形が異なり、子音語幹後續形には自由變異がある。

- (119) a. 母音語幹・1 語幹後續形: -op-  
b. 子音語幹後續形: -uop- ~ -<sup>?</sup>saop-

中稱の接尾辭も、美化の接尾辭も基底である種の揺れ (120) を示すものと言へるが、形態音素 z を應用すれば基底形を (121) のやうに立てられ<sup>\*37</sup>、基底で音節境界の揺れを示す形態素だと言へる。

- (120) a. 中稱: -(u)o<sub>o</sub>~-(<sup>?</sup>s)o  
b. 美化: -(u)op<sub>o</sub>~-(<sup>?</sup>sa)o-

- (121) a. // -z.o// ~ // -zo// 中稱  
b. // -z.op// ~ // -za.op// 美化

以上を認める場合、z の子音としての現はれは音節初頭で <sup>?</sup>s、音節末で t だが、基底では s であると考へられる。前者は子音語幹に後續する位置でしか出ないので必ず濃音化を被り、後者は通常の s の音節末での現はれ方である。1 脱落規則の環境に z 後續を加へ (122a)、z の實現規則を二つ作り (122b, c)、.ao の母音連續を回避する規則があれば、これら接尾辭の振る舞ひが説明される。

- (122) a. l-deletion  $l \rightarrow \emptyset / V \_\_\_ ]_{\text{VERB STEM } (.)S, n, z}$

<sup>\*37</sup> ここに見える-z. といふ單位に cranberry 形態素としての役割を認められるかどうかはまだ分からない。

- |           |  |
|-----------|--|
| b. z の變化  | $z \rightarrow s / C\_ \_ or V\_ \_ .C$      |
| c. z 脱落   | $z \rightarrow \emptyset / V(.)\_ \_ (. )V$  |
| d. 母音衝突回避 | $a \rightarrow \emptyset / \_ \_ o (同一形態素内)$ |

さらに、形態音素 *z* が *mo.z*-「集める」に見られると考へることができる。しかし、これだけではなぜ *z* なのかは證據不十分とされるであらう。最後にこの點を明らかにする。

これらの *z* の共時的な分析の可能性としては *empty consonant* (Clements and Keyser 1983) を認めるか、*ʔ* など他の形態音素を假定する (Martin 1992) ことも可能ではある。しかし、*s* の現はれを説明できる點、そして、*z* は *u* と関連づけられる點で *z* を指定する解釋が優れてゐる。*z* を指定すべき形式には必ず *u* が出沒する。*z* と *u* と同一音素と假定すると、子音として *s* で、音節主音として *u* で現はれ、しばしば脱落する音素としてその分布を述べることができる。先に 1 に由來する *u* について述べたが、同様の母音化が起こると考へるわけである。このやうな考へのもとでは、*mo.z*-「集める」の表示はそれほど不自然ではない。*[z]* が *[u]* と同じ音素だからである。

さらに、基底形に音節構造指定があるとすれば、分節音レベルでは基底形にほとんど *u=z* がないのではないかといふ疑ひが出る。*u* 變則の説明に用ゐられる *u* 挿入規則 (66) は、実際に多くの表層の *u* を説明できるやうに思はれる。

- (123) a. *.ku*. 「その」 //*k*//  
 b. *.kum*. 「金」 //*km*//  
 c. *.ku.lim*. 「繪」 //*klim*//  
 d. *.ha.nuul*. 「空」 //*hanl*//

S. J. Rhee (2002) は *u* の現はれを全て音聲的なものと見、發想としては上記の近いものを提案してゐる。しかし S. J. Rhee の理論的枠組は基底にある種の層で空の核を大量に用意し、なぜそこに *u* が出ないかを主な説明對象としてゐる。この考へ方は *empty nucleus* の *licensing* といふ用語に端的に現れてゐる。これでは削除説とあまり變はるところがない。

ここに提示した案では、挿入母音以外の *u* の現はれを、*z* の假定により説明することになる。具體的には表層で母音連続をなす *u* の例などが基底に *z* をもつ (124)。

- (124) a. *.ma.um*. 「心」 //*mazm*//  
 b. *.na.um*. 「治ること」 //*nazm*//  
 c. *.ti.puu.i.ti*. 「DVD」 //*tipziti*//  
 d. *.um*. 「銀」 //*zn*//

上記の基底形が奇異に映るやうなら音素代表の記號を  $\mathfrak{u}$  としても扱ひは大きくは變はらない。ただし、 $z = \mathfrak{u}$  は基底では子音として實現するか母音として實現するかが決まつてゐないこと、しばしば削除されることに注意しなければいけない。

ここでは形態音素  $z$  と捉へうる音交替現象を母音  $\mathfrak{u}$  と關聯付けた。ただし、二重母音  $\mathfrak{ui}$  の扱ひなど、まだ検討すべき課題も多い。媒介母音や變則用言の解釋に關はるため可能性を示しておくものである。

## 7 をはりに

本稿では cranberry 形態素に基づく音節構造が共時規則にはたらいてゐるといふ提案をした。従來說との對比を示すため、末尾に母音挿入説と母音削除説による順序づけされた規則群を提示した。 $z$  に關する規則も假に入れてある。讀者諸賢の批判を請ひたい。

なほ、形態的單位が音節化に關はるといふ本稿で示した解釋は、形態素の右端を音節の右端に合はせる仕組みである。今後、母音  $\mathfrak{u}$  の出沒以外にその仕組みがどう關はるか検討する必要がある。また、そのやうな仕組みは最適性理論によつても扱ひが難しくないものと思はれる。今後、稿を改めて論じたい。

## 参考文献

### 辭典

小学館・金星出版社編 (1993) 『朝鮮語辭典』小学館

劉昌惇 (1964) 『李朝語辭典』延世大學校出版部

운평어문연구소편 (1996) 『금성 국어대사전 (제 2 )』금성출 사

### 論文、論著

Ahn, Sang-Cheol. (1998, 2001) *An introduction to Korean phonology*, Seoul: Hanshin

Aronoff, M. (1976) *Word Formation in Generative Grammar*, MIT Press

Blevins, Juliette (2004) *Evolutionary Phonology*, Cambridge Univ Press.

Clements, G. N. and S. J. Keyser, (1983) *CV Phonology: a Generative Theory of the Syllable* (Linguistic Inquiry Monograph 9), MIT Press

de Lacy, Paul (1999) 'Morphological Haplology and Correspondence', Rutgers Optimality Archive #298

Han, Eunjoo (2011) 'A Stratal-OT Approach to the Overapplication of Coda Neutralization and

- Consonant Cluster Simplification in Korean', *Korean Journal of Linguistics* 36-2
- Hong, Sung-Hoon (2003) 'Richness of the base, lexicon optimization, and suffix', *Studies in Phonetics, Phonology and Morphology* 7.1, 215-243 The Phonology-Morphology Circle of Korea.
- Kenstowicz, Michael (1994) *Phonology in Generative Grammar* Blackwell Pub.
- Ladefoged, Peter and Ian Maddieson(1996) *The Sounds of the World's Languages*, Blackwell Pub.
- Martin, Samuel E.(1954) *Korean Morphophonemics*, Linguistic Society of America
- Martin, Samuel E.(1992) *A Reference Grammar of Korean*, Tuttle
- Rhee, Sang Jik (2002) *Empty Nuclei in Korean*, LOT Pub
- Stemberger, Joseph Paul (1981) Morphological Haplology *Language* 57(4): 791-817
- Tida, Syuntarô (2006) 'Polysemy and multi-word lexical items in Dom' Papuanists' Workshop 2006, 29th October 2006, The University of Sydney, Sydney, Australia
- 姜昶錫(1982) 「現代國語의 形態素 分析과 音韻 現象: 活用, 曲用에서의 '으 ~ 0' 를 中心으로」, 『國語研究』 50, 서울대
- 고영진 (1995) 「현대국어 물음법 씨끝의 문법화 과정에 대하여: -'냐' 를 중심으로」, 『원우론집』 22, 연세대학교 대학원 총학생회
- 김중규 (2010) 「하이투스와 音節」 정승철·정인호 편 『이중모음』 태학사 283-303
- 김홍석 (2008) 「현대국어 피동접사 결합에 대한 문법적 연구」 『국어사연구』 8, 57-65  
<http://www.gugeosa.or.kr/paper/08/0803.pdf> (2012年3月15日アクセス)
- 남기심·고영근 (1993) 『표준 국어문법론 개정』 塔出版社
- 배주채 (2008) 『국어 음운론의 체계화』 한국문화사
- 신승용 (2007) 『국어 음절 음운론』 박이정
- 李基文 (2008) 『新訂版 國語史概說』 태학사
- 이동석 (2005) 『국어 음운 현상의 공시성과 통시성』 한국문화사
- 이병건 (1971) 『현대한국어의 생선음운론』 일지사
- 이병근 (1981) 「유음 탈락의 음운론과 형태론」 『한글』 173 · 174
- 李善英 (2007) 「消滅語研究의 한 가지 方法에 대하여」 『語文研究』 35-3, 113-134
- 周時經 (1910) 『國語文法全』 京城南部尙洞博文書館
- 치다순타로 (2010) 「단어 인정 기준과 의미에 대해서」 『한국어 연구의 새 지평』 태학사
- 伊藤英人 (2009) 「語基說をめぐって」 『朝鮮半島のことばと社会』 明石書店、414-426

付録 A 挿入母音解釋

1. (a) *l*-deletion  $l \rightarrow \emptyset / V \_\_\_ ]_{\text{VERB STEM}} (. )S, n, z$
- (b) *h*-deletion(*h* 變則)  $h ]_{\text{H-IR-VERB STEM}} \rightarrow \emptyset / \_\_\_ C. \text{ or } \_\_\_ V$
- (c) *p*-deletion(*p*2 變則)  $p ]_{\text{P2-IR-VERB STEM}} \rightarrow \emptyset / \_\_\_ C. \text{ or } \_\_\_ V$
- (d) .*p*.C  $\rightarrow$  *p*C
- (e) vowel harmony  $\Lambda \rightarrow [\alpha\text{yang}] / [\alpha\text{yang}](.)C ]_{\text{VERB STEM}} + [\text{INF SUFFIX} \_\_\_$
- (f) (-2) aspiration  $h ]_{\text{VERB STEM}} + [-\text{son}, -\text{cont}, -\text{sg}, \alpha\text{place}] \rightarrow [+ \text{sg}, \alpha\text{place}]$
- (g) (-3) *l*-vocalization (*lu* 變則)  $l \rightarrow \text{u} / .l \_\_\_ (C).$
- (h) (-4) liquid nasalization  $[+\text{lat}] \rightarrow [+ \text{nas}] / \# \_\_\_ (\text{Sino-Korean})$
- (i) (-4) palatalization  $[+\text{cor}, -\text{son}] \rightarrow [+ \text{dr}] / \_\_\_ [\text{SUFFIX} \cdot (h)i, j$
- (j) (-) tensification(漢語)  
 $[+\text{cor}, -\text{son}, -\text{cg}, -\text{sg}] \rightarrow [+ \text{cg}] / [+ \text{lat}] ]_{\text{SINO-MORPH}} + [\text{SINO-MORPH} \_\_\_$
2. (a) *u*-insertion (媒介母音)  $\emptyset \rightarrow \text{u} / [+ \text{cons}, -\text{lat}] ]_{\text{VERB STEM}} \_\_\_ [\text{SUFFIX} C.$
- (b) *u*-insertion (*u* 變則)  $\emptyset \rightarrow \text{u} / .C \_\_\_ (C).$
- (c) *z*-vocalization  $z \rightarrow \text{u} / z \text{ が初頭音・末音として解釋できない場合}$
- (d) (-4) *n*-deletion(1*h* より後)  $n \rightarrow \emptyset / \# \_\_\_ i, j (\text{Sino-Korean})$
3. (a) tensification(用言)  $[-\text{son}, -\text{cg}, -\text{sg}] \rightarrow [+ \text{cg}] / [+ \text{cons}, -\text{lat}] ]_{\text{VERB STEM}} [\text{SUFFIX} \cdot \_\_\_$
- (b) *h*-deletion(2*a* より後)  $^h ] \rightarrow \emptyset / \_\_\_ . [-\text{cons}]$
- (c) *s* 變則等  $z \rightarrow s / C. \_\_\_ , V \_\_\_ . C$
- (d) (-4) *n*-insertion (2*d* より後)  $\emptyset \rightarrow n / [+ \text{cons}] \# \_\_\_ i, j$
- (e) (-4) *t, p* 變則處理
- (f) (-5) morphological haplology (1*l* 變則)  $l\text{u} \rightarrow \emptyset / l\text{u} \_\_\_ ]_{\text{VERB STEM}}$
4. coda rule
5. resyllabification etc.
6. voicing rule etc.

付録 B 母音脱落解釋

1. (a) *l*-doubling (*lu* 變則)  $l\text{u} \rightarrow ll / \_\_\_ ]_{\text{LU-IR-VERB STEM}} + [\text{INF SUFFIX}$
- (b) *u*-deletion (媒介母音)  $\text{u} \rightarrow \emptyset / V(l) ]_{\text{VERB STEM}} \_\_\_$

- (c) *l*-insertion (lA 變則)  $\emptyset \rightarrow l / ]_{\text{LO-IR-VERB STEM}} \_\_\_\_\_\_ [\text{INF SUFFIX}$
- (d) (-6) liquid nasalization  $[+lat] \rightarrow [+nas] / \# \_\_\_\_\_\_ (\text{Sino-Korean})$
- (e) *h*-deletion (h 變則)  $h \rightarrow \emptyset / \_\_\_\_\_\_ ]_{\text{H-IR-VERB STEM}+V}$
- (f) *p*-deletion (p2 變則)  $p \rightarrow \emptyset / \_\_\_\_\_\_ ]_{\text{P2-IR-VERB STEM}+V}$
- (g) (-6) palatalization  $[+cor, -son] \rightarrow [+dr] / \_\_\_\_\_\_ [\text{SUFFIX} \cdot (\text{h})i, j$
- (h) (-)ensification(漢語)  $[+cor, -son, -cg, -sg] \rightarrow [+cg] /$   
 $[+lat]]_{\text{SINO-MORPH}+[\text{SINO-MORPH} \_\_\_\_\_\_}$
2. (a) *ui*-deletion (ui 變則、Iui 變則)  $ui \rightarrow \emptyset / \_\_\_\_\_\_ ]_{\text{VERB STEM}V}$
- (b) (-6)*n*-deletion(1d より後)  $n \rightarrow \emptyset / \# \_\_\_\_\_\_ i, j (\text{Sino-Korean})$
3. (a) *l*-deletion  $l \rightarrow \emptyset / \_\_\_\_\_\_ ]_{\text{VERB STEM S, n}}$
- (b) (-6)*n*-insertion (2b より後)  $\emptyset \rightarrow n / [+cons] \# \_\_\_\_\_\_ i, j$
- (c) (-6) aspiration  $h]_{\text{VERB STEM} + [-son, -cont, -sg, \alpha\text{place}] \rightarrow [+sg, \alpha\text{place}]$
- (d) vowel harmony  $\Lambda \rightarrow [\alpha\text{yang}] / [\alpha\text{yang}](\cdot)(C)]_{\text{VERB STEM}+[\text{INF SUFFIX} \_\_\_\_\_\_}$
4. (a) *h*-deletion  $^h] \rightarrow \emptyset / \_\_\_\_\_\_ .[-cons]$
- (b) *t, p, s* 變則處理
5. tensification(用言)  $[-cg] \rightarrow [+cg] / [+cons, -lat]]_{\text{VERB STEM}[\text{SUFFIX} \cdot \_\_\_\_\_\_}$
6. coda rule
7. resyllabification etc.
8. voicing rule etc.

## 付録 C 音節末音規則以降の音韻規則

1. (a) 再音節化  $x. \rightarrow .x / \_\_\_\_\_\_ [+voc]$
- (b) 濃音化  $[-son] \rightarrow [+cg] / [-son]. \_\_\_\_\_\_$
- (c) 有氣音化  $[-son, -cont, -cg, -sg] + h \rightarrow [+sg]$
- (d) 鼻音化  $[-son] \rightarrow [+nas] / \_\_\_\_\_\_ . [+son, +cons]$
- (e) 流音化  $[+nas, +cor] \rightarrow [+lat] / \_\_\_\_\_\_ . [+lat], [+lat]. \_\_\_\_\_\_$
- (f) 流音の鼻音化 (鼻音化 (1d) と關聯)  $[+lat] \rightarrow [+nas] / [-cor, +cons]. \_\_\_\_\_\_$
2. (a) 有聲音化  $[-son, -cont, -cg, -sg] \rightarrow [+voice] / \text{non-utterance-initial}$
- (b) 内破音化  $[-son] \rightarrow [-rel] / \_\_\_\_\_\_ . [-cont], \_\_\_\_\_\_ \#$
- (c) *h* 弱化